

京都大学



白眉センターだより

Vol. 22

THE HAKUBI CENTER NEWSLETTER



まだ見ぬ世界へ出かけよう。

研究の根幹を支える人々に聞く

巻頭特別インタビュー・白眉センター事務職員

研究室・デスク
押しかけ企画

研究の現場から

海外渡航記



白眉センターとは

「白眉」は『三国志』（蜀書・馬良伝）の故事に由来する言葉です。三国時代、馬氏の五兄弟はすべて優秀な人材でしたが、とくに眉のなかに白毛があった四男の馬良が最も優れていたこと（「白眉最良」）から、最も傑出している人や物を「白眉」と呼ぶようになりました。

この故事に倣い、京都大学が将来有望だと太鼓判を押した若手研究者、それが「白眉研究者」です。文系理系を問わず多様な分野にわたるチャレンジングで創造性に富んだ人材を確保するべく2009年から立ち上げられた京都大学次世代研究者育成支援事業「白眉プロジェクト」では、優秀な若手研究者を年俸制特定教員（准教授、助教）として採用し、自由な研究環境を与え研究に専念させることにより、次世代を担う先見的な研究者を育成するための取り組みを進めています。

Contents

- 03 巻頭特別インタビュー
研究の根幹を支える人々に聞く
白眉センター事務職員インタビュー
- 08 研究室・デスク押しかけ企画
- 18 研究の現場から
佐藤駿/ 東島沙弥佳/ GAO Jie
- 23 海外渡航記
井内真帆/ 行方宏介
- 25 ポスト白眉の日常
潮雅之/ 田中祐理子
- 27 活動紹介/ 白眉セミナー/ センター日誌
- 30 受賞/ 出版物/ メディアでの紹介・出演
- 32 第14期白眉研究者

■ 巻頭特別インタビュー

研究の根幹を支える人々に聞く

白眉センター事務職員インタビュー

普段、我々研究者がお世話になりながらも、その実態をあまり良く理解していない事務職員の方々。今回のニュースレター巻頭インタビューでは、そんな知られざる事務の仕事や想いについて伺うべく白眉センターを訪ね、3人の事務職員の方々に会いしました。（聞き手：蓑輪陽介、海老原志穂、大谷由香。全て14期白眉研究者。）

白眉センター事務職員とは

聞き手 本日は、インタビューに応じていただきありがとうございます。最初に、簡単に趣旨を説明させてください。白眉センターが毎年発行しているニュースレターの巻頭にインタビュー記事を掲載する慣習があります。今年はどうなにかにお願いしようかなと考えたのですが、毎回、研究者に話を聞くのもどうかと思ひまして（笑）。

一同（笑）

聞き手 むしろ、普段じっくり話を聞く機会のない事務の方がどんなことをされているのか、そういう話を伺えたらなと思っています。そもそも大学において事務職員の方々はどんな仕事をしているのか、そして、白眉センターならではの事情、例えば業務の難しさとか、面白さとかがあったら、その辺りも聞きたいなと思っています。どうぞよろしくお願ひします。まず、順番に、お名前を伺えますか。

可貴 可貴です。私が一番古いですね。といっても去年からです。

柏原 柏原です。私は今年の1月からです。

徐 私は徐と申します。私も同じ時期からです。

可貴 ですので、私も去年からぐらいの話しかできないのですが……。もともと京都大学の職員自体がだいたい3年前後で異動することが多いんです。

聞き手 皆さんそうなんですか？

可貴 そうだと思います。だから、「4年いたら長いね」と言われるくらいなので、長い方でも3年程度しか、同じ部署にいません。さらに、私たちは特定職員という立場で、プロジェクトごとに最長で5年という形で関わります。

聞き手 普段、白眉センターの中ではどんな仕事をされているんですか？

可貴 私は研究者の採用業務を担当しています。

聞き手 事務の全体の構成はどうなっているのでしょうか。

可貴 組織としては本部の研究推進部研究推進課が統括・取りまとめという形で関わってはいるんですけど、個々の業務自体は、私たちが主に担当しています。

聞き手 柏原さんが主に担当されているのは？

柏原 全体の仕事が、運営業務と採用業務とに分かれてまして、



（可貴さん）

私は運営業務です。日常的に研究者の方々の問合せ対応もしています。

聞き手 昔は白眉センターの事務にメールを送ると、名前のわからない方から返事が返っていて署名もなくて。白眉研究者の間でも話していたんですけど、事務の方の名前が謎すぎるぞ、と（笑）。でも、最近は、柏原という名前はよくお見かけします。

一同（笑）

柏原 実は最近になって、メールに名前を明記をさせていただくようになりました、全員。

可貴 先生方と白眉の離任式などで話す機会があって、「送り手の顔が見えない……」みたいにすごく言われたので、名前を書きましょうっていうふうな方針に、最近変わりました。ただ、以前、メールに名前を書いていなかったのにも、きちんと理由があったんです。例えば、事務のAさんがずっとメールのやり取りをしていたけど、Aさんがお休みだったので、代わりにBさんが突然返事をしましたってなったときに、先生方が「え、何で？」みたいに混乱してしまうかなと。

聞き手 ややこしくなりそうですね、確かに。

可貴 でも、やっぱり受け取り手としては、顔が見えないというのは不安ですよ。ですので、名前はこれから明記していきます。



(柏原さん)

白眉センターの業務

聞き手 皆さんの担当されている仕事は、とても幅広いですよ。

柏原 そうですね。外部や他部署とのやり取りがありますし、また、白眉センター長である高倉先生の秘書業務もあります。そういう意味で、仕事を通じてだいぶ視野が広がりますね。

聞き手 何でもやらないといけないですね。

可貴 ただ、特定職員が必ずしも秘書業務をするというわけではありません。それも期ごと、年ごとに違っているのだと思います。

聞き手 その期や年ごとに仕事の内容も違うかもしれない？

可貴 そうですね。

徐 私は、例えば受託研究・共同研究、あと寄付金などの申請に伴う手続きや審議などの準備の仕事をさせていただいております。あと、出勤簿と休暇簿の取り扱い。ちょっと前までは、先生たちの兼業や海外出張関連の事務なども。

聞き手 そういえば、本題と外れてしまうんですが、出勤簿って私は受け入れ部局の事務室で管理してもらっていて判子を押すんですが、白眉研究者って皆さんそんな感じですか。

可貴 出勤簿を、部局の中で一括管理して台帳みたいな形だとじられてるところもあれば、研究室で押印できる形とか、いろいろあると思います。

聞き手 それぞれ違うんですね。

徐 受け入れ部局で許可をもらったら、そのあとに白眉センターでセンター長の印を押さなきゃいけないんです。あと、年度末になると、先生たちの休暇の集計もしないといけないので、そういった業務も担当します。

聞き手 以前の所属では、出勤簿に印鑑を押したことが無かったので……。休暇の申請もネットだけで完結していましたし。

徐 デジタル管理。

聞き手 そうです。ここにきて、印鑑押すのかと、カルチャーショックが(笑)。

柏原 はい、アナログです(笑)。

徐 そう、ここアナログ(笑)。

可貴 アナログにも良いところもありまして。私、京大の共通事務に一時いたことがあるんですけど、事務の出勤簿に印鑑を押しに来られる先生に書類を渡したりとか、聞かなか

んことを聞いたりとかってというのはありましたね。先生方とコミュニケーション取る良い機会ではありました。

聞き手 事務に会いに来てよというメッセージと(笑)。

可貴 (笑)。部局によって運用が違ってもいいんですけど。

聞き手 白眉センターならではの仕事もありますか？採用は特にそういう面が強そうですね。

可貴 多分、応募された皆さん思われたかもしれませんが、採用に際して、長い時間をかけて丁寧に1年間かけて審査が行われているんですね。

聞き手 確かに長かったです。

可貴 白眉センターの場合には、書類審査から面接審査まで、丁寧かつ公正に研究者を評価するっていうステップをかなり注意深く踏んでいます。その審査員も選び抜かれた方々であって。ここまで長い時間かけて採用を行うというのは、事務としても異例のことなのかなというふうに思っています。ですので、研究者の方が採用されたあとに、卒業っていうか、離職とか転職ってなると、少しもったいないなという気持ちにもなります。もちろんタイミングなどがありますし、仕方がないことだとはわかっているのですが……。その意味でも、白眉研究者の方々がよりよく研究できて、採用後の5年間の活動もしやすくなるようなことは何かないかなと、白眉センターに来てから1年たつと、そんなことにも、ちょっと目が向けられるようになった感じです。

聞き手 そんなふうに気にしていただいているのは、ありがたい話です。

可貴 各先生方が、必ずしも、私たち事務の近くにいらっやらないので、機会のある時は「出張どうでしたか？」とか、声かけられたらなと。私は特に採用業務担当なので、直接的な関わりというのは4月以降はもうなくなってくるので……。

聞き手 実際1年を通じて採用業務があると、ある年度の採用業務が終わったら、すぐに次の年度の採用業務が始まるイメージでしょうか？

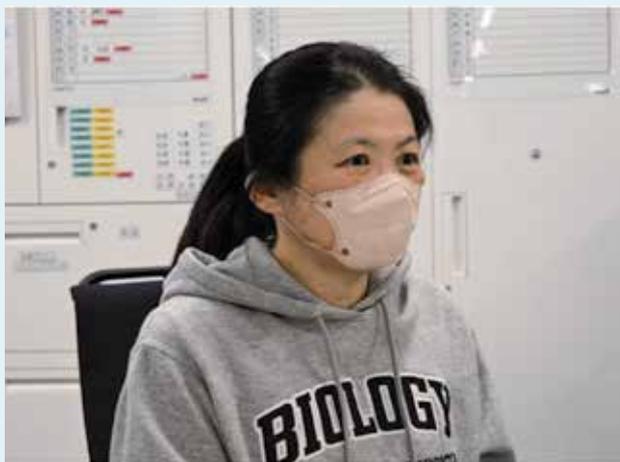
可貴 そうです。実際には各年度の業務が同時進行します。例えば12月に内定が出るとするじゃないですか。12月に内定が出る頃には、次の公募のスタートはいつにするかみたいな検討が始まる。で、内定者の受け入れをしつつ、次の公募に関する業務が始まるみたいな。

聞き手 大変ですよ、次年度のことも考えながら別の業務も回してと。柏原さんはどうですか。こういう仕事は白眉センターならではの仕事というのはありますか？

柏原 そうですね。文理問わず幅広い分野のトップ研究者が集結してるので、フィールドの垣根がないなと。そのおかげで、学内外や国内外を問わず、幅広い部署や法人とのやり取りがあります。また研究者の先生方や高倉センター長、あその他のプログラムマネージャーの先生方など、文理の垣根を越えたハイレベルな意見交換ややり取りが発生するのは、白眉ならではの良さだと思います。

聞き手 実際、海外の大学や機関と、やり取りされる機会も結構あるんですね。

柏原 例えば、先生方の兼業先が海外の機関、という場合は結構ありますね。そうすると、海外とのやり取りが発生します。いわゆる兼業になるのかとか、クロスアポイントメントになるのか、とか。ちょうど今も、そういう業務の真っ最中



(徐さん)

です。

聞き手 海外の大学と事務的なやり取りするのは、結構大変ですよ。システムも常識も違いますし……。徐さんも特定職員なんですか？

徐 私は派遣で仕事をしています。

聞き手 いつからこちらにいらっしゃってるんですか。

徐 1月の終わりごろからです。その前にいた病院の病歴管理室では、メールすることはほとんどありませんでした。でも、ここに来ると、基本的に毎日、メールにメール。普段使うのは Word とか Excel など、どこにいても使う技術なんです。ただ、白眉センターにいと、先生方の日々の研究に関する仕事があるので、今までと違う種類の責任の重みを感じますね。

聞き手 白眉の研究者って、あんまり事務のある建物には来ないものですか？ 基本はメールですか？

一同 (笑)

聞き手 あまり会わない？

可貴 会わないですね。私はどっちかっていうと、先生方と関わりたいとか話したいって思うほうなんです。ちょっと遠い存在やなっていう感じはします。

聞き手 難しいですね、皆さん居場所がばらばらだから。

可貴 そうなんです。別にそんなに関わり合いを求めてない方だったら楽かもしれないですが。少し寂しいなと思うときもあります……。

事務のやりがいとは

聞き手 誤解を招くような聞き方になってしまいますが、事務の仕事って何が面白いんですか？ いえ、批判する意図ではなく純粋に知りたいんです (笑)。

可貴 何でしょうね。その人のタイプによると思うんですけど、私は一つの作業とかをブラッシュアップしていくのが好きかもしれないです。ですので、去年一年間、同じ業務を担当させてもらって、例えば、自分やったらこうするのにとか、こっこのほうが楽やないの？とか、こういう工夫できへんかなとか、何かをアップデートしていこうと考えていくのが好きかもしれないです。

聞き手 じゃあ、少しずつ改善を続けることに充実感を感じる？

可貴 そうですね。

聞き手 なるほど。そうすると、ある一定期間、同じような業務を繰り返すのは、むしろ改善しがいがあっておもしろいと感じるんですか。

可貴 そうですね。でも例えば、業務内容ややり方自体も少しずつ変わっていくので、その点も面白いですね。今も AI をどう使って効率化するのか、今後どう AI とうまくつきあって、自分の知恵と向こうの知恵を融合していけばいいのか考えたり。

聞き手 実際、普段の業務に AI は関わり始めているんですか。

可貴 先日は Excel について聞いたら答えてくれました。ChatGPT に、「縦列にはこれとこれとこれとこれがあって、全部まとめてこういう表示にしたい」って言ったら、全部出してくれて、「計算式はこれです」って。「見本を見せてください」って言ったら、サンプルも出してくれるんです。

聞き手 すごい。

可貴 ただ、私たちの世代って、まだアナログやったと思うんです。最終的には自分で判断ができるし、実際していると思うんです。結果を見て、「何か、これちょっとおかしいかも」とか。次の世代になったらどうなっていくんやろ？とも思います。

聞き手 柏原さんは、普段仕事をする中で、どういう点に、やりがいや面白さを感じますか。

柏原 私の場合は、大学の中で働こうと思ったきっかけの一つとして、自分の子育ての中で教育機関というものに興味が出てきた事があったんです。それに加えて、優秀な研究者の方々の活動の一翼を担えるようなことがしたいという想いもありました。それでグローバルで文理問わずいろんな先生がおられるような場所にと。

聞き手 じゃあ事務業務一般的に面白さを感じるというよりも、大学の事務業務に特にやりがいを感じている？

柏原 そうですね。元々は金融業界に長くいたんですけど、興味がだんだん教育に移ってきて……。アカデミックな世界にふれてみたい。あと、子どもの今後の進路のためにも、少し調査がてらに、なんて (笑)。

一同 (笑)

聞き手 徐さんはどうですか？事務の仕事をする中で、どういときに面白さを感じますか？

徐 やはり、先生方のサポートをできる仕事なので、そういうところにやりがいを感じます。最近は少しずつですけども採用の仕事も手伝い始めました。次はどういう先生方が採用されるのかなと、ドキドキしながら仕事してます (笑)。私は、実は台湾出身なんです。10年以上前にも日本にずっと滞在していた時期があったのですが、一度台湾に帰国していました。また2年くらい前に日本に戻ってきました。娘も京都大学で勉強してるんです。

聞き手 ちなみに、お子さんは京都大学で何をされているんですか。差し支えなければ。

徐 大学院生で、今は iPS 細胞の研究に取り組んでいます。

聞き手 大学院生になるタイミングで日本に？

徐 そうですね。ちょっと話が長くなるんですけども。娘



(インタビュー中の談笑。)

も11歳までは日本で暮らしていました。その後、台湾に移って。本当は大学受験のタイミングで日本に戻りたかったんです。でも帰国子女の進学の見込みが限られていて、文系が多かったんです。娘はバイオテクノロジーというか、細胞の研究などに興味があったので、台湾の大学で自分の好きな学部に入りまして、大学院から京都に。

聞き手 じゃあ娘さんは日本語も話せるんですか？

徐 そうですね、もう普通に話せます。

聞き手 じゃあバイリンガルですね。

徐 英語も大丈夫です。

聞き手 トリリンガル！

徐 ちょうど今、ニュージーランドに滞在しています。言葉ができると人生も楽しいですよ。自分もそうです。もし私が中国語しかできなかつたら、ここで皆さんとお話しもできませんでした。毎日わくわくしています。

事務職員と研究者の関係

可貴 逆に、先生方から見て事務の存在はどう見えているのでしょうか。こちらから見ると、先生方って共通事務の部局のほうにも連絡して、受け入れ先の先生方にも連絡して、白眉センターにも連絡して……と。所属が多岐にわたるので大変なんじゃないかなと思ったりもするんです。先生方にとって、私達はどんな存在なんですか。

聞き手 私の場合は、普段は受け入れ先の学科事務みたいな、いや学科秘書さんかな、みたいな方に、日常的にはお世話になっています。その中で、白眉に関連することだけは白眉センターの人に聞かなくちゃなと思ってますかね。あと、先程も話に出ましたが、ちょっと前までは、皆さんのお名前があまりわからなかったの……。

柏原 (笑)

聞き手 「白眉センターの人たち」みたいに一括りに認識してました。

柏原 もやもやと全体的にふわっと捉えている (笑)。

聞き手 基本的には、私自身が事務的なことができない人間なので、事務の皆さんのおかげで生かされてるなど、ありがとうございます、みたいな感じで見てます。ただ、ちょっと白眉センターの事務さんは遠いイメージが、やはりありますね。普段接する事務職員とは違う、一つ挟んでの事務職員み

たいなイメージがあって、何をお願いしたらいいのかがよくわからない感じが正直あります。何か困ったら、とりあえず部局の事務さんに聞きます。

徐 例えば先生方が海外に出張される時に必要なビザ申請とか、そういった申請、証明書関連は、部局の事務ではなくて、直接私たちに声をかけていただければ大丈夫です。

聞き手 白眉の研究者の人って分野もいろいろ違いますし、そういう人たちをサポートする白眉のセンターの事務は、すごいスーパー事務なんだろうみたいなイメージです。

可貴 そんな良いイメージを。

柏原 勉強させていただいてます。

徐 恐縮です。

聞き手 変わりものの白眉研究者から変な依頼があってびっくりするみたいなことはないですか (笑)。

可貴 そうですね。そういうことはないですが……。でも面白いですよ。とある先生の講演の依頼があったんですけど、その依頼先の名前を見て、あ、こんな組織があるんや、みたいなことはあります。新しいことを知りました、みたいな。お寺からの講演・研修依頼とか、お坊さん向けの。自分だけの生活では関わらないことに触られます。あ、そういう世界があるんやな、と。自分やったら絶対旅行で行かないモンゴルのどこそこに行くとか。

聞き手 うらやましい (笑)。

一同 (笑)

徐 実際、ここに来たら、相当世界が広がりましたね。デスクに向かいながらも、いろんなことを見られるようになりました。

白眉センターの未来

聞き手 最後に、先ほどの改善の話じゃないですけど、白眉センター全般について、「もっとこうなったらいいのにな」と思うことはありますか。抽象的な話でも細かい具体的な話でも、もし何かあれば。

可貴 今、時代的にも人間関係がバーチャルになってきてるなどと思うんですね。でも、実際に人と人が膝を突き合わさないと、生まれにくいことっていうのもあるんじゃないかなと。先生方が研究していくうえで、どこまでが実際に会う関係性が必要で、どこまでがメールのやり取りで済んでしまうのか。やっぱりここにいる意味、白眉センターという一つの母体の中で、柏原さんも先程言っていたように、文系理系も含めて垣根がない、この特別な環境に在籍いただいている中で、どう成長されていくのか、なにか手助け出来たらなど。人と人との関わりの機会や場所を提供するとか。相乗効果になるようなことを、もっとこちらでもできることがあるんじゃないかと。そのためにも、先生方からも、してほしいこととか、足りないんだよなって思うことを、お話しできる関係を築けたらなど。

聞き手 お互いに、もっと気軽に話ができる関係、でしょうか。

可貴 「今度こんなことしたいんですけど、どう思います？」と先生に聞かれたら「それやったら何々先生に相談したらいいんじゃないですか？」みたいなつなぐことができるとか。「何々と一緒にしたいみたいなこと言うてはりましたよ」とか。

聞き手 ハブとして機能するってことですよ。

可貴 そうです。「今度、同じ時期にモンゴル行かれますよ」とか（笑）。「あの先生も誰かと共同研究したいよ」と言っていたよみたいに、橋渡しが上手にできたらいいのになあと。

聞き手 確かに、そうなったら素晴らしいですね。

可貴 先生方自身の間でも、そんなインタラクションが自然と生まれていくような場所であってほしいなと思います。

聞き手 ありがとうございます。柏原さんから、もし何かあれば。

柏原 可貴さんがおっしゃった続きですが、研究者の先生方と事務で飲み会の企画などもあるのでそういった交流の機会をもっとふやせたらなと。

聞き手 ありがとうございます。

柏原 どんどんそういったところに参加されたら、先生方同士でもいろんな情報交換ができますし、先輩、後輩で、貴重なお話もできると思います。そういった機会を利用していただいて、センター長や優秀な研究者の先輩方のように、日本のみならず国際的にも羽ばたいていただければなと。そういった先生方と白眉センターの成長を支えていきたいなと思っています。

聞き手 ありがとうございます。徐さんからも、もっと白眉がこうなったらいいのに、ということがあれば教えて下さい。

徐 そうですね。繰り返しになってしまいますが……。もっと先生たちと私たちが一緒にお話できる機会が増えれば、先生方が私たちに何か要望されているのか、もっと気楽に教えていただけるのかなと。そういう会話をもっともっとできればなと思っています。

可貴 それで、さっきおっしゃった、「これって共通事務の担当だろうか、白眉センターの担当だろうか」みたいなところを悩まずに、「ちょっと電話して聞いたらええわ」って

気楽に思ってもらえるようになるといいですね。

聞き手 電話すると迷惑じゃないですか。結構忙しいんじゃないかなと思ってしまって。こんなしょうもないことで電話したら駄目かなと思ってしまう。

柏原 気軽にお問い合わせいただければ。いつでも。

聞き手 ついついメールしがちなんですが、もっと電話するようにします（笑）。

徐 はい（笑）。お待ちしております。

可貴 ふらっと寄っていただいても、全然構わないです。

白眉センターを研究者の実家に

聞き手 白眉センターって、結構 OB さんが来られたりしてますよね。

可貴 そうですね。研究者にとって帰ってこられる一つの場所になっているのかなと。近くまで来たとか、京都の出版社来たからセミナー寄りましたとか。

聞き手 みなさん、こうやってまた戻ってくるのは、やっぱり事務職員の方々がしっかりされてるからだろうなと。ずっとここにあるというのがあるから、こうやって集まったりできるんだろうなと思います。

徐 研究者の実家みたいな感じですね（笑）。

柏原 あと、そういった先輩や OB との飲み方などで、ぜひ普段聞きにくい話なんかも、お伺いされたほうが、今後のためにいいかと思います。ちょっとくだけた話ができますから（笑）。

聞き手 今後のためにも、そうします（笑）。本日は、本当にありがとうございました。とても貴重なお話を聞ける機会になりました。

一同 ありがとうございました。



(インタビュー後。全員で1枚。)

早川 龍

HAYAKAWA Ryū

頭の中こそ研究室

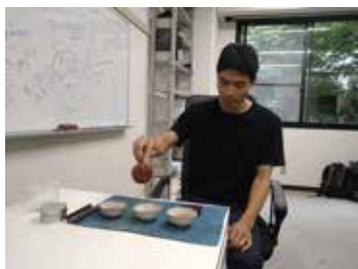
量子が持つ重ね合わせ等の特性を利用して高速計算を実現する次世代コンピュータ「量子コンピュータ」のアルゴリズムを解析し、その限界を探る研究に従事する早川さんの研究室には、今年買ったばかりという昇降型のデスクに従来型「古典パソコン」のモニターが2つ、それにiPadがあるだけ。一竿だけの書棚もほとんど空だ。

出勤するとパソコンで毎日世界中から投稿されるピアレビューに目を通し、研究のアイデアを練り、研究室の壁に設置されたホワイトボードやメモパッドに書き出して、思考を深める。「集中とリラクセスが大切です。アイデアが湧き出して、頭の中が整理されてくると嬉しい」と早川さん。

NHK 教育テレビの「アルゴリズム体操」を踏まえて「量子アルゴリズム体操」を作ることにはできる？と尋ねたら、「重ね合わせが再現できないから人間には無理」と笑った。



▲ 早川さんの研究室は理学部の植物園に隣接している。窓からの景色が美しく、小鳥のさえずりが楽しい。



▲ リラクセスの秘訣はプーアル茶。小さな中国茶器と、藍染めのランチョンマットに銅の茶さじ。持ち物の一つ一つが洗練されていて素敵だ。

▼ 静謐に東洋文化を愛し、時代の最先端の研究を追求する彼に、在りし日の湯川秀樹を想像してしまう・・・



FEDOROVA Anastasia

フィオードロワ アナスタシア

映画にも歴史があって・・・

絶大な人気を誇る大衆娯楽であると同時に、広範な思想的影響力を持っていた映画。アナスタシアさんは、その映画の歴史を専門とする研究者だ。

GHQ 占領下の民主主義政策や東西冷戦といった政治的背景が20世紀の映画に与えた影響を分析し、映画が戦後日本社会の共通認識形成に果たした役割を探ってきた。映画の制作や批評、観客の受け取り方に着目し、映画自体のDVDやビデオ、映画雑誌や監督のインタビュー、観客のレビューなどあらゆる情報源を読み解いていく。時には海外の国際映画祭で一週間ひたすら映画を見続けることもあるという。

棚には膨大な数の雑誌コピーや映画DVDが取られており、目を通すのにいくら時間があっても足りなさそう。祖母が映画技師だった影響で幼少期から映画への関心を深めてきたアナスタシアさんは、「自分の研究が人々の映画理解を助け、楽しみを増やせるなら嬉しい」と語る。



▲ 貴重な映画DVDの数々。

▼ 国際映画祭の参加証。過去の貴重な映画を観るため、世界中から映画研究者が集まるのだそう。



▼ 昔の映画雑誌コピー。蟹工船！



本郷 峻

HONGŌ Shun

いつも心はフィールドに

現地の狩猟生活の維持を前提とした動物生態研究を行う本郷さんの研究フィールドは、コロンビアやカメルーンなどの熱帯雨林。センサーカメラを使用して、野生動物を観測し、同時に現地の人々の生活調査を行う。2024年7月から兼ねて行う総合地球環境学研究所の研究プロジェクトで、さまざまな大学と共同で研究を行う必要から、研究室での業務も増えたが、それでも多くの研究時間は研究室の外で費やされる。

研究道具の数々はタフな環境下で本郷さんの研究を支えてきた。濡れた地に置くリュックは底に小部屋が作れるものを。新聞記者御用達のプラチナ万年筆のプレスマン0.9mm シャープペンと、パイロットのマークライターはずっと使用している愛用品だ。その日の調査概要はほぼ日手帳にまとめている。フィールドにも持ち出すiPadのケースは経年変化が使用環境の厳しさを物語る。本郷さんの京都での日常はフィールドの延長線上にあるのだ。



▲ 研究室がある総合地球環境学研究所は、森に浮かぶ宇宙船のよう。



▲ 本郷さんの最近の専らの懸念はアマゾン川の干ばつ。いつも現地の人々の生活に思いを馳せる。



▲ 本郷さんの研究には欠かせないセンサーカメラ。フィールドに出るときにはスーツケースに大量に詰め込む。

村田 陽

MURATA Minami

書を頼りに思想の海を泳ぐ

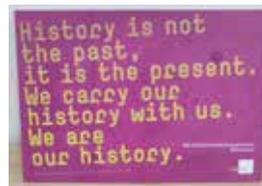
19世紀の英国を主な対象として政治思想史を研究する村田さん。文献調査が重要なため、研究には大量の本が付きもの。全く新しい概念に触れる際には、しっかりとした辞典を出発点とすることが多いようだ。得た知識をもとに、膨大な本から関係する記述を探することで、当時の思想的・文化的時代状況などを探る。現代においても、電子化されていない文献は多く、海外の図書館を回ることは大事な作業の一つだ。本の質感や重さなど、実物を前にして初めてわかる情報も重要。

大昔の異国で書かれた文章であっても、それを感じさせない普遍性にふれる瞬間は醍醐味の一つ。「でも過度な一般化は禁物です」と。歴史研究における重要な指針らしい。

葉は必須道具であるとともに、お気に入りアイテムでもある。特に大事にしているのは、プラトンの描かれたギリシャのもので、ここぞというときにお守り代わりに活躍しているとか。



▲ 葉コレクションの一部。村田さんの一番のお気に入りは友人がギリシャでのお土産にくれたプラトンの葉だが、取材者2名（ともに理系）の琴線に触れたのはアインシュタインの言葉が書かれた赤い葉だった。



世界各地でみつけたマグネットたちが研究室のあちこちに。



▲ 母校の同志社大学の卒業記念ぬいぐるみと、研究生生活を支えるAirpods。



武田 紘樹

TAKEDA Hiroki

部室から目指す宇宙

重力波の研究を通じて重力の謎に迫ろうとする武田さん。所属の部局は対話を重視しており、年に一度引っ越しがあって、必ず誰かと相部屋だ。武田さんの研究室の向かいには「お茶部屋」と呼ばれるミーティング・ルームがあるのに、皆が集まってくるのは必ず武田さんの研究室。ボードゲームにボールにギター、酒瓶までもがソファ周辺に転がり、壁際のホワイトボードには数式が並ぶ。まるで部室のような雰囲気だ。ここで多くの仲間たちとのディスカッションを通じて、日々新しい発想が生まれる。

「こんな面白い世界があることを高3になるまで知らなかったんです。物理をもっと早く知れたかった！」と語る武田さんは、アウトリーチにも力を入れている。2023年に発売された『14歳からの宇宙物理学』(KADOKAWA)は韓国語に翻訳され、今度は中国語にも翻訳出版される予定だ。宇宙の秘密に挑む武田さんの旅は、いつだって仲間たちといっしょだ。



▲こだわりのデスクはウォールナットの一枚板！デスク上にはノートパソコンを含めて3つのモニタが配置され、それらで情報を得ながら、手元のiPadで計算する。ただし洗練されているのは武田さんのデスク周りだけで、振り返れば混沌が広がるのが、武田さんの研究室の魅力。



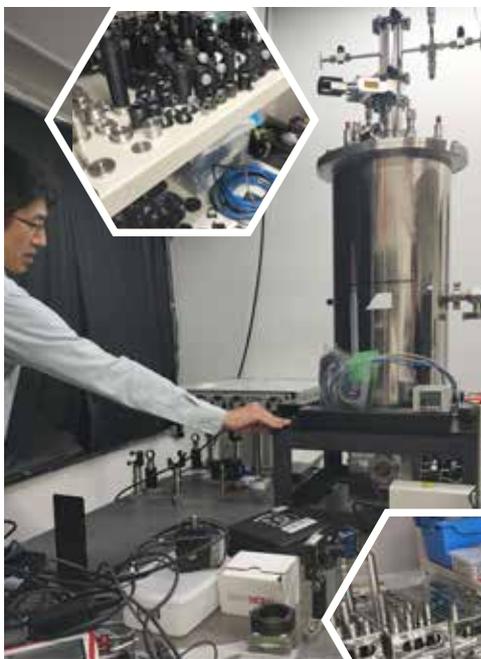
蓑輪 陽介

MINOWA Yōsuke

1 × 1 = ∞ だった

今すでにあるものを使ってどのようなことができるのか。蓑輪さんの視点はいつもそこにある。もともとレーザーの持つ特性を実験に活用していた蓑輪さんは、ある日ヘリウムを持つ特性の面白さを知り、「2つを掛け合わせたら誰もしたことがないことができる！」と両者の特性を活かす方法を考え抜き、結果として両者と深く関わる「渦」が研究対象となった。

実験のための装置もまた、ほとんど場合はよくある部品を組み合わせで自作している。理学的興味関心を工学的知識で解決していくのが蓑輪さんの強みだ。「巨額の実験装置をシェアするのもいいんですけど、自分でやってる感が楽しいんですよ！」と言いつつも、近年は一番楽しい実験装置の組み立てを、いっしょに実験を進める学生に任せることが多い。「一人でできることは高が知れているので、皆でやっていきたいんですよ」。人も掛け合わせることで無限の可能性を発揮することを知っているのだ。



▲ 虹色六角レンチは、どこにあっても見つけやすく、色でサイズがわかるので、ストレスなく組み立てをするのに重宝している。

◀ 渦を観測するための研究装置を組み立てるスペースには細かい部品がいっぱい。多くの場合はこれら部品を組み合わせで実験装置を作る。

▶ 実験室とは別の研究室は合部屋で秘書さんが常駐している。細かい部品が整理されている実験室とは対照的に研究室のデスクはカオスだ。「必要なものがあるだけです！」と蓑輪さん。

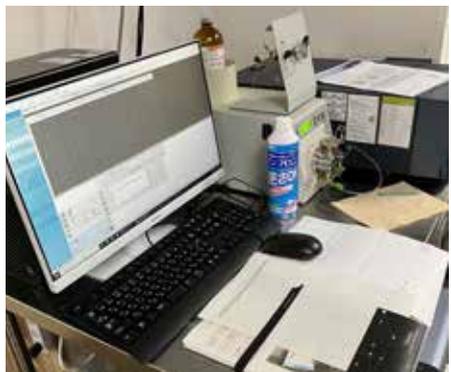


吉野 達彦

YOSHINO Tatsuhiko

化学反応 2.0

広々とした実験室にはところ狭しと実験装置がセットされ、試験管などのガラス器具や試薬が置かれている。窓際には長いデスク。その上に吉野さんや院生らのパソコンが並ぶ。吉野さんの研究対象は炭素と水素が結合した有機化合物。身近なところではスマホやテレビの液晶に使われている。がっちり安定したこの有機化合物の結合をさまざまな金属の触媒によって活性化させる実験を日々試みている。たくさんの試験管を固定するための台や、糸のように細いガラス製のマドラーなど、実験のために必要な器具は手作りすることもある。印象的だったのは、院生たちが常に行き交い談笑する研究室のにぎやかさ。人が多くて落ち着かないのではという取材者の質問に、「むしろ静かな研究室にいたことがない」という吉野さん。実験を支えるチームワークも研究の重要なファクターなのだと思感したインタビューだった。



◀ 質量分析器は実験のラストアイテム
▼ 周期表の前で触媒に使う金属について説明する吉野さん。楽しそう。



▶ 複数のバイアルを吊すための器具は3Dプリンターで自作。
◀ 薬剤を少量だけ検出するキャピラリーも手作り。「有機合成屋さんにはガラス細工ができないとね」と吉野さん。



▲ 研究室ではお気に入りのえび型スリッパで過ごす。履いたときにしっぽが後ろに伸びるのがキュート。



◀ 直近の研究で参考にする資料は、書店や図書館で使う小型の移動式本棚に載せてデスク後ろにスタンバイしておく。これも研究に集中するためのこだわりの品。



▶ 入り口では角大師の魔除けがお出迎え。
▲ 長時間の研究には良い椅子が欠かせない。



大谷 由香

ŌTANI Yuka

戒律と破戒の仏教学

仏教学が専門で、現在は破戒（仏教の戒律を破ること）についての研究をしている大谷さんの部屋に入ると、壁一面では収まらないほどの書籍と資料が目を見張る。その多くが漢文で書かれた写経などを読み解いていくのが日々の研究。その資料は、素人目に見ても読みやすそうなものから、文字自体を読むのが難しいものまで様々だ。中には美術品に関する書籍まである。

人文系では珍しいことに仏教学では資料のデータベース化も進んでいるとのことだが、全てがネット上で手に入るわけもなく、資料収集も研究には欠かせない。大谷さんは資料の調査団の団長もしており、お寺を訪問しての資料収集も頻繁におこなっているそうだ。

仏教に関するいくつかのお話を聞かせていただけたが、その中でも、仏教説話が伝わるにつれて破戒を許すような逸話が付け加えられていくという話には人のさを感じずにはいられなかった。

VIERTHALER Patrick

フィアターラパトリック

日本から研究する韓国現代史

韓国の現代史を専門とするフィアターラさん。静かな研究室には、大きなデスクに研究用のデスクトップパソコンとおしゃれなスピーカーが並ぶ。壁沿いの本棚にずらっと並ぶ書籍や史料はハンゲル、日本語、英語と様々だ。研究の基本は文献や史料の調査であり、電子データ・印刷物問わず大量の資料との戦いだ。中には政治家の領収書の写しなんてものまで。博論執筆時代の失敗から日々の整理整頓を心がけているとのこと。

「今は単著の出版を目指して、博論の翻訳や執筆がメイン」と語るフィアターラさんのお気に入りの音楽はクラシックとジャズ。学部生のない人文研究所の個室は静かすぎるのもあり、特に集中して作業したいときには重要という。帰り道にあるリサイクルショップで掘り出し物を探すのが好きで、研究室にあるソファや本棚に置いてある韓国の壺などもリサイクルショップで買ったものだ。今後も新たな研究室グッズが発掘されていくのだろうか。



▲ ずらっと並ぶ本棚は整理整頓が行き届いている。未整理だという印刷物さえも十分整理されているように見えた。
 ◀ 広々としたデスクは昇降機能付きの自慢の一品。両側に設置したスピーカーでジャズやクラシックを流しながら研究に集中する。



▲ ビールを飲みながら研究... するわけではなく、中身は水。丈夫で大容量なので重宝するとか。ソファはなんと6,000円で購入！
 ◀ コーヒーよりお茶派。普段は日本茶が多いがこの季節は中国茶がお気に入り。



後藤 明弘

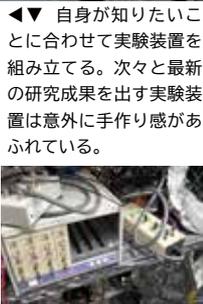
GOTŌ Akihiro

マウスファーストで拓く新知見

記憶が長期にわたって定着するまでのメカニズムを探るために、日々マウスとともに実験を続ける後藤さん。動物を相手にする研究は体力勝負で、ワークライフバランスの実現が目下の課題だ。「毎日の餌やりやゲージ交換などは、アルバイトを雇って、お任せしています。京都大学の学生さんたちは真面目で丁寧。とても助かっています。マウスが健康であるということは研究の前提ですから！」と後藤さん。

個別の実験・研究を行う個室のほか、他の研究者とシェアする実験室にも化学実験をするための個人ブースを持ち、またマウスが好む環境を作るための暗室でも実験、というように、研究棟を行ったり来たりして研究が進められる。

記憶の定着のためには、睡眠がとても大切だということがわかってきた。たっぷり休息をとった方がいいのはわかっているけれど、それがなかなか難しい... 大量のビタミン剤がその葛藤を物語っている。



◀◀ 自身が知りたいことに合わせて実験装置を組み立てる。次々と最新の研究成果を出す実験装置は意外に手作り感がある。
 ▶▶ マウスは暗いところが好きだが、赤色は認識できない。このため赤いランプの暗室で実験が行われ、パソコンモニターにも赤いセロファンがかけられる。

PSTRAGOWSKI Piotr

プストラゴスキ ピョトル

無から有を生む

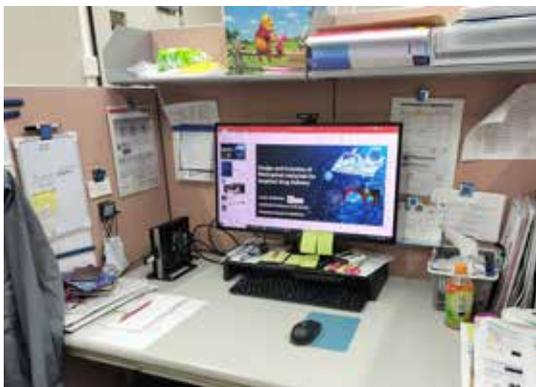
プストラゴスキさんが研究しているのは、純粋数学の中でも、安定ホモトピー理論という、次元が変わっても変わらない形の性質に関する理論だ。抽象的な「形」の性質に関する理論だが、数論（素数などを研究する分野）にも深く関わっているという。

そんな研究に取り組む研究室は、小さなデスクにノートパソコン、黒板とチョークがあるだけの非常にシンプルな部屋だ。書籍も見当たらないが、「教科書が書かれている分野はもう完成しているのでやることはない」ということで、読むのはもっぱら arXiv（プレプリントサーバー）の論文ばかりだそう。思考のための紙とペン、論文を書くためのパソコン、議論するための黒板だけというこの空間も既に完成された空間、かと思いきや、「まだ着任して間もないのでこれから色々セットアップしていきたい」ということらしい。



▲ 黒板に書かれているのは先日来訪した研究者とのディスカッションのメモ。チョークトークをすることが多い数学者には、チョークは重要なアイテム。日本のチョークは世界的に見ても良質とのこと。
◀ 小さなノートパソコンが仕事道具。

▲ 静かすぎる環境がやや不満とのことだが、窓から見える風景は気に入っている。



▲ 取材時はちょうど研究発表の準備がされているタイミングだった。プーさんのファイルケースが目立つが、別にプーさんは好きでも嫌いでもないらしい。
▼ 基本的には実験室を一人で使っている。これらの機材全てが下田さん個人の所有！たまに「貸してください」と人が来ることも。

▼ 足元にはヒーターが。結構おすすめらしい。



下田 麻子

Shimoda Asako

小さな構造から広がる 大きな可能性

ほとんど全ての細胞から分泌される細胞外小胞が、生体内のコミュニケーションにより、どのような役割を担っているかを明らかにすることで、再生医療や免疫分野への応用を目指す下田さん。「取材の前に掃除をした」と遠慮がちに言うが、どこもかしこも整頓されていて普段から綺麗に扱っているのが見てとれる。別室の実験室を独占し、フラスコを使って培養した小胞などを何やらっこいい高価そうな装置で化学的に分析し、パソコンを使って解析するのが日常の風景ようだ。執拗にお気に入りの実験装置を尋ねたが、何度聞いても特にこだわりはないそうだ。

大学までは消極的だったがインドアだったので勉強は嫌いではなく化学科に進学、その後ハイドロゲルの研究室に興味を抱き研究の道へ。しかし、意外にも趣味は野球観戦で、ドジャースのファンだそう。観察するところが多いのが野球の魅力だと教えてくれた。

SHARMA POKHAREL Sanjeeta

シャルマ ポカレル サンジータ

象の気持ち、人の気持ち

温かなイメージのあるゾウだが、実は人間との間で、土地や資源を巡って衝突が続いている。特にインドでは紛争のために100頭の象と500人も人間が毎年亡くなる。Sanjeetaさんは、この激しい紛争が、象たちの健康状態や生存にどのような影響を与えているかを探っている。

鍵はストレスホルモンだ。その一種であるコルチゾールの濃度によって、象が感じていたストレスの度合いを測ることができる。血液の採取が難しい生きた象では、新鮮な排泄物に残されたホルモンを調べることになる。そのため象が糞をする瞬間を待ち、何時間も藪に潜むこともあるのだそう。最近では、象の体毛にもホルモン分泌の痕跡が残ることが明らかになり、過去に感じたストレスの履歴を一気に復元できる可能性も出てきた。

「愛すれば愛するほど、インスピレーションが湧いてくる」とほほ笑む通りに、机、壁、ホームページから名刺や靴下まで、Sanjeetaさんの関わるあらゆる場所とモノに象の姿がある。



▲ 研究室の表札から象である。

▼ ホルモンの履歴が残る象の体毛。

▲ 象の排泄待ち。

▼ 念願の象糞を採取する様子。

▲ 赤ちゃん象の物語がつづられるホームページ (<https://bhuntelephant.com/>)

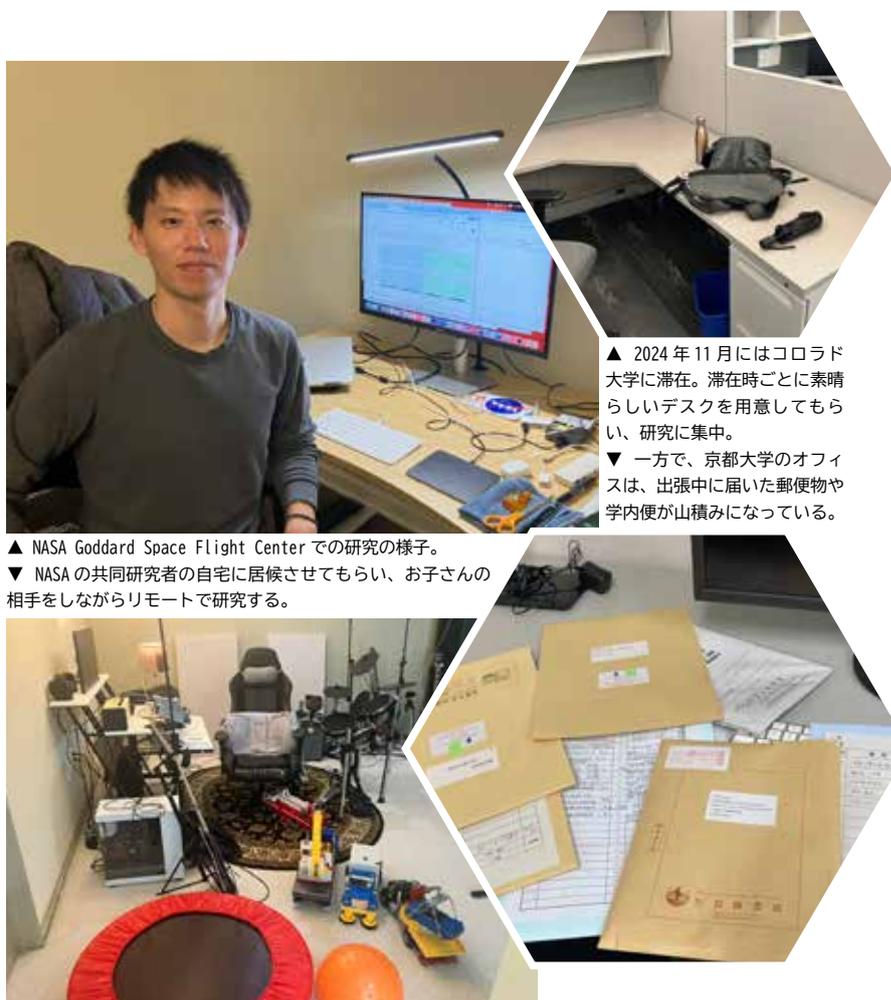
行方 宏介

NAMEKATA Kōsuke

どこでも研究室

行方さんが所属する宇宙線研究室では、スタッフと学生が同じ空間で研究に取り組むというユニークなスタイルが採用されており、学生たちとの議論が日々の活力源となっている。行方さんの研究テーマは、太陽に似た恒星の爆発現象を解き明かすという壮大な挑戦。最新の観測データとPCさえあればどこでも研究は可能だ。観測データは、地上の巨大望遠鏡や宇宙望遠鏡から取得するため、研究室には特殊な機材がほとんどない。むしろ、学生や他の研究者との対話が最大の武器だと言える。

行方さんの研究スタイルはまさに「どこでも研究室」。国内外を問わず研究者たちを訪問し、共同研究を進めるため、行方さんは文字通り拠点を点々とする日々を送っている。現在はNASAの衛星データを活用するプロジェクトのため、米国を拠点に活動中だ。「議論を通じて生まれる新しい視点が、研究を一步進めてくれる。それが何より楽しい」と語る。



▲ 2024年11月にはコロラド大学に滞在。滞在時ごとに素晴らしいデスクを用意してもらい、研究に集中。

▼ 一方で、京都大学のオフィスは、出張中に届いた郵便物や学内便が山積みになっている。

▲ NASA Goddard Space Flight Centerでの研究の様子。

▼ NASAの共同研究者の自宅に居候させてもらい、お子さんの相手をしながらリモートで研究する。

OPHINNI Youdiil

オフィンニユディル

ウイルスはどこから来たのか、どこへ行くのか

インドネシア出身の Youdiil さんは、15 年にわたって日本と米国でウイルスと感染症の研究を続けてきた、筋金入りのウイルス学者だ。次世代シーケンシング (NGS) の技術を駆使し、ウイルスのゲノムを解析することで、病原体の進化や移動経路を解明し、過去の感染経路を辿ってきた。最近では過去だけでなく未来のリスクを予測すべく、インドネシアの熱帯雨林を探検しながら、土壌や水、空気といった環境中の DNA を調査し、地域生物の相互作用や分布を包括的に理解する「地域ゲノミクス」の確立を目指している。目に見えないものを扱い、わずかな汚染が研究の命取りになる Youdiil さんにとって、信頼できる自分の実験器具は何よりも大切なものだ。謙虚さをモットーに、何もかもが混ざるジャングルと清潔極まる実験室を往復する日々を過ごす彼の研究は、東南アジアにおける感染症対策の希望である。

海老原 志穂

EBIHARA Shiho

言語を通して世界を見る

言語はその文化圏の世界観を映し出す鏡であり、人類が世界を理解するための重要な手段である。しかし、近年、世界の言語数は減少し、それに伴い多様な世界観も失われつつある。こうした言語消失の危機の中、海老原さんは過酷な高地でヤクと共に暮らすチベットの人々の言葉を研究している。例えばチベット語には、ヤクの年齢や性別、外貌に応じた表現や、草地の特徴を細分化した語彙が発達している一方、魚はすべて「ニャ」、虫は「ブ」の一言で片づけられる。このように、言語の研究から現地の生活に根差した思いも寄らぬ世界の見え方に触れられるのが嬉しいのだそう。「言語の固有性の限界に迫りたい」と、何度も何度も話者のもとを訪ね、文法や語彙の記録を丹念に残してきた海老原さんの取り組みは、消えゆく言語や文化の保存に向けた貴重な試みだ。これからは言語が切り取る世界の多様性を明らかにすると同時に、それを未来へとつなげていって欲しい。



▲ 次世代シーケンサーについて初めて学んだハーバード大学の超並列シーケンサー。



▲ インドネシアのカリマンタン島の熱帯雨林でフィールド調査中

▼ インドネシアのスラバヤ市でのサンプリングを終え、アイランガ大学の同僚や地元の動物園のスタッフと。



▲ 左から順に、イニシャル「Y0」のラベルが貼られたエッペン社製のピペット (10 µl、100 µl、1,000 µl)。



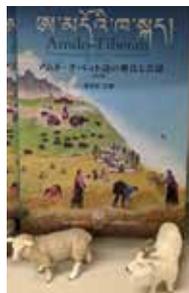
▲ チベット文学の翻訳を通じて、チベット文化の発信にも努めている。

◀ チベット語の本が並ぶ本棚。

▼ ヤクマグネットがかわいい。



▼ チベットの弦楽器ダムニオン。店じまいするインドの老舗楽器店から最近購入



木下 実紀

KINOSHITA Miki

ペルシア文学の奥にあるもの

「文学は人間の精神性を表す」と語る木下さんは、ペルシア文学の研究を通じてイラン人の心性をひも解くことを目指している。

イランの公用語であるペルシア語について、「とても、とても美しい」と話しつつ、母国語話者でないからこそ感じる違和感や独自の視点の研究の強みになっているという。必ずしも言論の自由が保障されておらず、厳しい検閲がかかっていた近代イランでは、作家たちは翻訳や翻案を通じて宗教的・政治的メッセージを忍ばせる形で言論を行っていた。これまでの研究では、原文とそのペルシア語訳を一文一文照らし合わせることで、その創造性と背景にある人々の精神性を読み解いてきたのだそう。とにかく文献を緻密に読み込み、今後は現代文学作家へのインタビューも行い、作品の背景を探っていく。本棚にはペルシア語の辞典や書籍がずらりと並び、そういった日々の研究の様子がひしひしと伝わってきた。



◀ 多くの書籍とイラン手工芸品が並んだ本棚

▼ 著名作家の顔写真が載ったイラン暦カレンダー



▼ ペルシア語の百科事典



坂本 達也

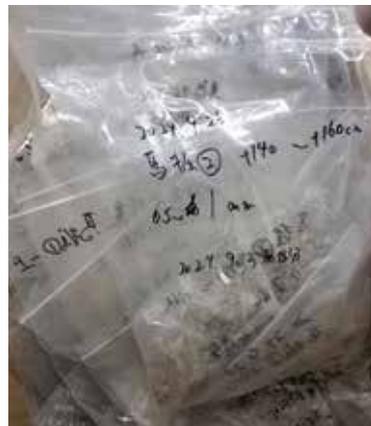
SAKAMOTO Tatsuya

魚の記憶を探る細密な日々

「イワシとイカは冷凍庫にあるから、晩ご飯に困ったら来てください」と笑う坂本さんの研究室は、あちらこちらに特殊な機材が配置される。

坂本さんはイワシが持つ耳石（じせき）を化学分析することで、その個体の生育歴を探るプロジェクトを進める。海に出ることが多い研究領域かと思いきや、魚を捌いて5mmほどの耳石を取り出し、樹脂で固めて専用の機材で1/1000mm ずつ削り、分類し、化学分析に提出し…と、研究室で行う作業も膨大かつ繊細だ。

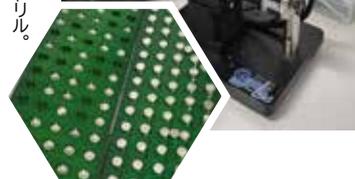
足下の段ボールの中身は、袋詰めして小分けにされた各地の砂利。この中から化石化したイワシの耳石を見つけ出して、はるかな昔に生きたイワシの生活を探る。机の上にはボルトガルの研究室から持ち帰ったイワシの耳石を分類整理したケースが大量に積まれており、これからの解析を待つ。かつてのイワシから現在のイワシまで、そして世界中のイワシを。坂本さんの視野は広い。



▲ 段ボール箱の中にある大量の砂利。顕微鏡を覗いて、耳石だけをこの中から取り出す。気が遠くなりそう。



▶ 坂本さんの研究室で一番高価なのがこちらの貝や骨を化学分析するためのドリル。



MCNEILL Lucy Olivia

マクニール ルーシー オリビア

星に魔法を

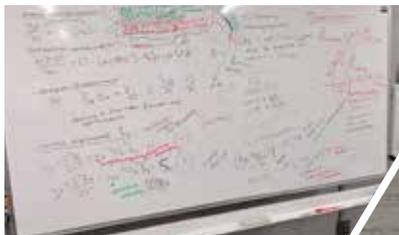
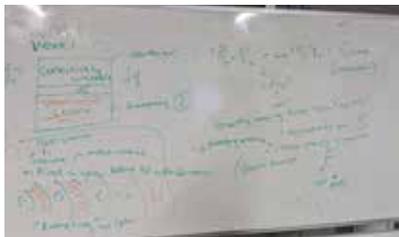
恒星などの爆発とともに宇宙に生まれる星やブラックホール。これらがどのように発生するのか、天体の観測記録と、「応用数学」理論という魔法を用いてそのメカニズムを明らかにすることがマクニールさんの研究テーマだ。

星はそもそも不透明なので、星の内部構造を理解するためには解析的モデルと、3Dのシミュレーションを比較することが必須。普段は力学の本を読み、計算式を紙とペンで書いたりもするが、Mathematicaというソフトウェアも用いてあらたな理論や仮説を立てる。時には基本的な流体力学で簡単に解けない「重い」計算をパソコンに計算させることもある。

研究室訪問のインタビュー時、マクニールさんはまだ白眉研究者として着任前だったため、前職の理研の研究室を紹介していただきました。京都でお会いするのを楽しみにしています！（編集より）



▲ 星からいかにしてブラックホールが作られるかを解説。
▼ スパコンに計算をさせたシミュレーションで星の内部構造を見て流体力学を解析中。



▲ グループでのディスカッションにはホワイトボードも活用。
▶ ノートに書かれた天体に関する計算式はまるで、マンガ『チ。』のよう。



山田 真太郎

YAMADA Shintarō

DNA からがんの原因を探る

DNA は、私達の体の中の細胞ひとつひとつに入っている体の設計図である。何らかの原因でその設計図にエラーが入ると、老化やがんなどの病気の原因となる。山田さんの研究は、このエラーに着目した発がんプロセスの解明だ。

近年、DNAのエラー（変異）を網羅的に検出できる次世代シーケンス法の技術革新が進んでいる。山田さんの研究の鍵は、得られる膨大なエラー情報から、がんに関わるエラーを抽出する手法の開発である。自ら手法を開発するだけでなく、学内外の研究者との共同研究で複数の方法を組み合わせることで確度を高めていく。というのもヒトのDNAの中で、遺伝子として働く部分はたったの数パーセント。他の領域の多くは機能が不明で、変異が見つかったとしてもその重要性を理解するのは容易でない。がんの新しい変異が見つければ、発がんの新しいメカニズムの理解や、治療法の開発につながるかもしれない。



▲ DNA 試料を精製する実験機
▼ 試料は溶けないように -80 度に保管されている



▲ 微量な DNA を増幅する装置。新型コロナウイルスの PCR 検査でも同様の機械が使われている
▼ 微量な DNA 溶液を正確に分取できる



◀ 試料を高速で回転させて遠心力で試料を分離する

研究の現場から

魚眼レンズ：サカナから社会について考える

第13期 特定助教（理学研究科） 佐藤 駿

私が白眉センターに着任して、約一年半が経過した。去年度も、調査地であるアフリカから白眉 Newsletter にフィールド研究に関する拙文を寄稿したが、今年も例に漏れずアフリカで本項を書くこととなった。このような機会を私に提供し、編集作業してくれた吉野博士をはじめとする14期の白眉メンバーの皆様がこの場を借りて深く御礼申し上げる。さて、私は修士課程一年からアフリカの古代湖であるタンガニカ湖でカワスズメ科魚類の生態をSCUBA潜水による野外調査により明らかにしてきた。私の専門は社会生物学・行動生態学、多くの読者の方々にとって馴染み深い分野ではないだろうが、動物の行動を研究対象とする学問のなかでも、特にダーウィニズムや適応主義の影響を強く受けた分野である。本稿ではタンガニカ湖産カワスズメ科魚類の行動生態学的な研究について紹介する。

私の調査地であるタンガニカ湖は大地溝帯上に形成された古代湖（図1）であり、その大きさは約32,900 km²、四国の大きさが18,800 km²であることを鑑みれば、いかに大きな湖であることがわかるだろう。そしてこの壮大な湖には、250種以上のカワスズメ科魚類が生息している。これらの固有種は数種の祖先種から爆発的な種分化を遂げ、それぞれの種ごとに多様な色彩・形態を獲得した（図2）。また、タンガニカ湖産カワスズメ科魚類の多様性は形態や色彩だけではなく、その社会や子育て様式まで及ぶ。タンガニカ湖産カワスズメ科魚類は、一夫多妻や一妻多夫、複婚といった様々な配偶システムをもち、これは脊椎動物で確認されたすべての配偶システムのパターンを網羅していると言われていた。また、我々ヒトのように、タンガニカ湖には魚類の中で唯一グループで子育てを行うカワスズメ科魚類が生息しているのだ。



図1 タンガニカ湖と私が普段使用しているダイビングタンク。



図2 タンガニカ湖の多様なカワスズメ科魚類。

このようにグループで子育てをすることを生態学においては、協同繁殖（Cooperative breeding）と呼ばれる。通常の魚類の子育てとは、親魚が卵や稚魚を保護することだ。しかし協同繁殖種の場合、親魚に加えて、子育てが終わっても巣に残留し続けている成長した子供や、全く見ず知らずの個体（ヘルパーと呼ばれる）が繁殖グループに加わり、捕食者から稚魚を防衛したり繁殖巣の掃除、動くことができない卵や稚魚に水を送るといった方法で、子育てを手伝うのだ（図3）。

図3 協同繁殖種の一例である *Neolamprologus bifasciatus*。手前に見える個体がヘルパーで、奥に見えるのが繁殖メス個体。この種の場合、ヘルパーは繁殖メスの子供であり、年少の兄弟姉妹が生まれた後も巣に留まり主に掃除を手伝う（Sato et al. 2022）。

近年の野外研究により、タンガニカ湖産カワスズメ科魚類の協同繁殖における鉛と鞭で維持される絶妙なヘルパーと繁殖個体の関係が見えてきた。ヘルパーが仕事をサボると、

繁殖個体はヘルパーを口で突いて罰を与えるというのだ。一方で、繁殖個体はヘルパーが仕事をする限りにおいては巢の滞在を許容する。この関係は Pay-to-Stay 仮説（日本語訳するならば家賃仮説とでも呼ぶべきだろうか）として支持されている。また、系統樹を用いた進化解析では、タンガニカ湖の協同繁殖は体サイズの小さな分類群から平行に複数回進化したことがわかってきた。つまり、タンガニカ湖のシ

ビアな捕食圧に対する適応として、彼らはグループで繁殖するという社会システムを獲得したのだろう。

社会の複雑化はどのようにして発生し、どのような帰結をもたらすのか。ヒトから遠く離れた魚類こそがその答えを提供してくれるかもしれない。

夜にも奇妙な研究現場

第12期 特定助教（総合博物館） 東島 沙弥佳

私はさまざまな観点からしっぽの研究を進めている。ヒトという生物にはしっぽがないせに、なぜ人ならではの文化表現にはしっぽがたくさん登場するのだろうか。我々が生物学的および人文科学的にどのように「ひと（ヒト+人）」になったかを知る鍵がしっぽだ、というのが私の信条である。そのため、私の推し進める「しっぽ学（Shippology）」には多様な研究アプローチが必要となる。たとえば、生物学的なヒトがいつ、なぜ、どのようにしっぽを失ったのかを知るためには、基礎的な知識として形態学や解剖学、すなわちしっぽ周りにどういう骨があり、どんな風に筋肉がついているのかを把握する必要がある。そう、骨を測ったり遺体を解剖したりするのである。

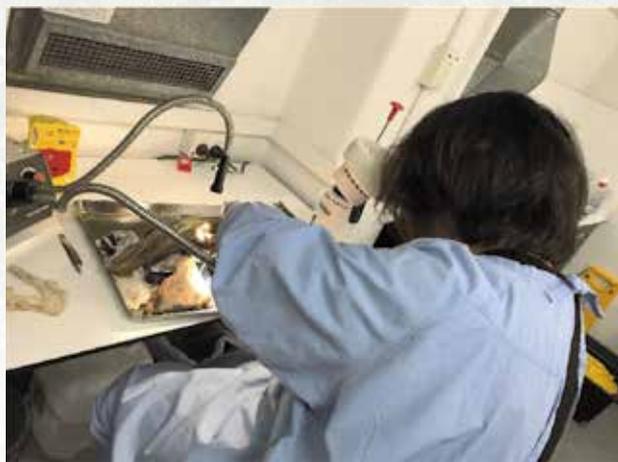


図1 コアラの解剖風景。

私はこの、動物の体に触れるという作業が大変に好きである。骨や筋肉は、大変に雄弁だ。真摯に向き合えば、多くのことを教えてくれる。彼らからのメッセージを受け取るにはそちらに集中せねばならず、意識が一点に向かって深まっていく様子は座禅や茶道の点前にも通じるところがある。骨の計測や解剖が楽しいという感覚は、同じような研究をしている人達ならば容易に理解してくださるものだと思うのだが、どうやら一般的ではないらしい。骨・遺体が研究対象である、と話すとき多くの方は、ぎょっとして上体を少し後ろに反らすのだ。

まして、それが「好きだ」などと宣おうものなら、今度は足元が一步後ろへ下がる。なぜそのような反応が返ってくるのか、まったく理解できなかったかつての私は、相手が下

がった一步分さらに踏み込んで「なぜですか？」といちいち尋ねてみたものだ。そうすると大抵「だって、そんなの怖いじゃないですか」という答えが返ってくる。もう少し突っ込んで尋ねてみてはじめて、その「怖い」というのは「お化け」的な怖さのことなのだとは私は知った。

このように普段の素行が悪いからなのか、あるいは解剖という仕事をしているからなのかは判然としないのだが、知り合う人間の多くに私は、血も涙もなく怖いものもなく、むしろ嬉々として動物の体をいじくりまわす狂人だと思われる節がある。嬉々として動物の体をいじくっているのは間違っていないし、私だって人並みに怖い思いをしたことはある。だが、よくよく考えてみたらお化け的なものに対する感受性はかなり低い。そしてそれは、この仕事をするのに意外と役に立っているのかもしれない。

これまで私が訪れた研究施設やその周辺には、「出る」とまことしやかに囁かれる場所がいくつかあった。たとえば、東海地方にある某生物学の研究所に所用で伺ったときのこと。懇親会もあるので、その日は研究所の近くにあるホテルに一泊することにした。そこは老夫婦が経営されている小規模なホテルだった。どこことなく昭和の香りがするのに加え、館内は全体的に薄暗い。さらに印象的だったのは、不思議なほど館内にもものが多い点だった。そこかしこに謎の人影や置物がずらりと飾られているのである。変わった趣味だなあ、と正直思った。でも、旅先で謎のものを買ってしまおうという癖は私にもある。だから特段気にも留めなかった。飲み会を経てホテルに帰ると何事もなく夜を過ごし、朝ごはんを食べ、翌日にまた研究所を訪れた。その朝、知り合いの口から出たのは予想外の一言だった。

「昨日は大丈夫でしたか？」

この言葉に、私の脳は一旦フリーズする。昨夜は泥酔した覚えもない。それなのに、なぜ私は心配されているのだろうか。もしや何か大失態をしでかしたのだろうか。覚えがない、というのは単に覚えていないだけなのかもしれない。私、なにか致しましたでしょうか、とおそろおそろ尋ねてみると、彼は笑いながら首を横に振る。そして、こう続けたのだった。

「あのホテルは『出る』んです。何もなかったですか？」と。だがどんなに思い返してみても、私のところに出てきた

のは美味しい朝食だけだった。お化け側にしてみれば、なんとも甲斐のない客である。

これまでのところ私は終始このような調子で、お化けとの出会いを回避してきている。サルやコアラやヒトを解剖させていただいたり、実験動物たちに日々お世話になってはいるが、彼らが夢枕に立ったことはない。そもそも彼らが夢に出てきたとて、再会の喜びを感じはしても怖いという気持ちは一切湧いてこない。だからこそ、うまくお付き合いできているのかもしれない。

ただ、一度だけ不思議な経験したことがある。あれは京都大学某所の研究室にて、骨の計測をしていた時。先方のご厚意で遅い時間まで作業させていただいた日のことだった。建物の中はすでにしんと静まりかえっていて、人間はおろか生物の気配などない。骨標本の収蔵室は細長い構造をしていて、奥に標本庫、手前に作業用のデスクがある。節電が叫ばれる昨今のこと、私は標本庫側の電気を消して作業を続けていた。いつものように、わくわくと骨を測って時間が過ぎていく。そんな中、なんの前触れもなく事件はおきた。

がたがた、がたがたがたっ！

と、突如標本庫の方から大きな音がしたのである。地震ではない。当然、誰かが入ってきたわけでもなかった。もしかして標本になにか起きたのではないかと私は慌てて、標本庫側へと向かい、部屋の電気をつけた。だが、そこには先ほどまでと全くと変わらぬ標本たちが、ひっそりと並んでいるだけだったのだ。

標本になにもなくてよかった。私はほっと胸を撫で下ろす。なにかの聞き間違いだったのだろう。そう思って標本棚周辺の電気を再び消し、作業スペースに戻ろうと踵を返した時、

がたがたがたっ！

と、背後でまた大きな音がしたのであった。その後、再び標本庫を確認したのは言うまでもないが、音の原因はついぞ見つけることができなかった。何度思い返してみても、あの事件だけは原因がまったくわからないままである。

How do we study the evolution of the mind: The evolving methods

第13期 特定助教（野生動物研究センター） GAO Jie

In this article, I would like to introduce several common and cutting-edge methods in the research of animal cognition with a bit of touch in the history of this field. I will include my own research as examples and discuss my current project in the end.

There are many facets of the study of the evolution of the mind. This field is also called comparative cognition, because the fundamental logic behind it is to compare different species, link them with phylogenetic and environmental factors, and try to rebuild the evolutionary path of certain cognitive abilities. Before a more systematic research system was built in this field, many early studies have paved the way for the standardized methodology in the later phase. Many people are familiar with Pavlov's dog experiment. He used a bell sound with feeding behavior, and later, the dog could produce saliva upon hearing the bell sound without seeing any food. This is called conditioning, a crucial technique used commonly in almost all animal-related activities, including animal training, farming, and of course, animal experimental studies.

In the last century, many researchers started to focus on non-human great apes, because they are the closest related to humans. How unique human languages are had also become a heated topic. Among the stories and anecdotes of many famous language project apes, such as Kanzi the bonobo, Koko the gorilla, Washoe the chimpanzee, and Ai the

chimpanzee, one episode impressed my mind until now from the moment I read it. It's chimpanzee Gua. Researcher Winthrop Niles Kellogg and his wife raised Gua at their home, with their infant son Donald. At first, they hoped Gua could learn to speak human languages in this foster environment, because it's similar to a developing human baby's environment where they could learn to speak. However, they found that instead of Gua learning to speak human languages, their son Donald started to "speak" like a chimpanzee, i.e., making chimpanzee vocalizations. This very engaging study strongly showed how good humans are at mimicking, and chimpanzees, on the other hand, are probably not, at least compared with humans.

Some people may fantasize this kind of closeness with wild animals, but we gradually came to realize that it is not right to put wild animals together with humans. There are considerations in terms of safety, hygiene, and the effect on the development of the animals: they are supposed to be with their own social partners instead of humans (and perhaps, also the effect of the development of humans, like little Donald). Animals became experimental participants, and researchers are not supposed to live with them: we need to study them in a distance, using controlled scientific methods. With this study field growing and the development of various technology, fixed

studying paradigms have been developed, and so are novel, cutting-edge ones.

The probably most adopted method is what I would like to call, the object-based paradigm, or the face-to-face paradigm, not literally though: researchers design a task, and conduct it manually, sometimes face-to-face with the animals. When I did my very first experiment in this field, I did a gaze following test with François' langurs, a species of monkeys. The test is as follows. I sat on a chair in front of the test monkey's room so that I was close to the monkey and my eyes were about the same level as the monkeys'. Then, I grabbed their attention by bringing up a peanut, their favorite food. Then, when they were looking at me, I moved my head and stared at the sky for 10 seconds. All of these are recorded, and we "coded" whether the monkey followed my gaze or not by checking the video. Gaze following is an important ability, because it can help animals pay attention to what others are looking at: a predator, a food, or a social member. It's also regarded as one of the basic abilities of empathy. In this experiment, I did the task face-to-face with the animals. Another example comes from a project in bonobos, close relatives to chimpanzees and then humans, showing how pro-social they are: they share food with strangers! It may not sound surprising to humans who are not comparative psychologist, but for us, it is very surprising: I have seen captive chimpanzee mothers don't even share food with their children. In this experiment, researchers manipulated the door so the bonobos can choose to open or not open it for the stranger bonobos. This method was also object-based. Although not strictly face-to-face with the animals, there is no other technology involved.

After my first project in monkeys, I joined the team at Kyoto University to study chimpanzees. The chimpanzees there were trained to use touchscreens, and most of my studies were done using touchscreens. There are several advantages to use touchscreens. First, it is more well-controlled. In the object-based paradigm, there could be many conscious or non-conscious biases. For example, in the gaze-following experiment, it was possible that I cannot fix my head angle exactly the same for every test. For the bonobo experiment, it was possible that the stranger bonobos appeared a bit earlier or later, different in each test, causing a possible minor effect to the results. If we use a computer task on a touchscreen, like we do with human participants in many psychology experiments, the appearance and duration of the stimuli images and videos could be strictly controlled. Secondly, using touchscreens enables a more accurate recording of the results. In the face-to-face tests, confirming animals' choices can be tricky sometimes. However, because

they need to touch the screen to make responses in touchscreen tasks, this problem could be solved. Also, response time could be recorded by the test program in the computer. In face-to-face experiments, if one wants to acquire response time data, one needs to play back the experiment video, set marks on the video, and calculate the duration for each test trial. Third, the use of computer frees the hands in terms of preparing and showing stimuli materials. My previous supervisor told me that he had to take photos, print the photos, cut the photos, and paste the photos, to prepare the test photos, and during the experiment, exchange them a lot, in his youth for conducting experiment. Now, with the help of computer, we could just take the photos, and edit them, and then use programming, so they could appear automatically in the tests. My first study using the touchscreen was to test if chimpanzees could learn the rule of the rock-paper-scissors game. Every test trial had two photos, and they needed to choose the stronger one to get food rewards (Fig. 1) . Every test session had 48 trials. Imagine all the photo switching if I had to do it in a face-to-face manner!

All these reasons made me decide to continue the touchscreen methods in my new projects with domestic goats. I started this project because land mammals are important in evolution, but their cognition is rarely studied. Studying a domestic species could also help understand the effect of domestication on the animal minds. I have trained several goats to use the touchscreen, by step-by-step conditioning. First, I used a stick and a plastic plate and trained them to touch the plate to get a piece of carrot (Fig. 2) . Then, I used a white board and a magnet shape and trained them to touch the shape on the board. And finally, we transferred to the touchscreen (Fig. 3) . They just completed a pilot test in shape discrimination.

Many other methods are rising, too, apart from

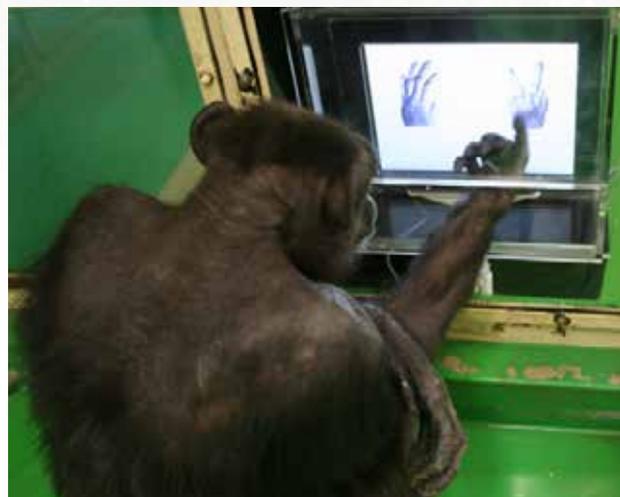


Fig. 1 Chimpanzee Ai choosing "scissor" against "paper" on a touchscreen.



Fig. 2 Training goat Ryu to touch the plastic plate using his mouth.



Fig. 3 Goat Yoshino doing a task on a touchscreen.

touchscreen tasks. I used an eye-tracker, which tracks eye gazes, to complete an experiment to know if chimpanzees look at the strange body parts in search for their body perception. Self-assembled machines could be adopted, too. For example, in a study finding the strategy pigeons use in flying, researchers let pigeons wear light backpacks containing sensors. If this is ever needed, I will plan to adopt new technology for the goats, too. How cool it is for goats to have backpacks collecting research data.

References

- [1] Kellogg, W. N., & Kellogg, L. A. (1933) . The Ape and The Child: A Comparative Study of the Environmental Influence Upon Early Behavior. Hafner Publishing Co., New York and London
- [2] Chen, T., Gao, J., Tan, J., Tao, R., & Su, Y. (2017) . Variation in gaze-following between two Asian colobine monkeys. *Primates*, 58, 525-534.
- [3] Tan, J., Ariely, D., & Hare, B. (2017) . Bonobos respond prosocially toward members of other groups. *Scientific reports*, 7 (1) , 14733.
- [4] Gao, J., Su, Y., Tomonaga, M., & Matsuzawa, T. (2018) . Learning the rules of the rock-paper-scissors game: chimpanzees versus children. *Primates*, 59, 7-17.
- [5] Gao, J., Adachi, I., & Tomonaga, M. (2022) . Chimpanzees (*Pan troglodytes*) detect strange body parts: an eye-tracking study. *Animal Cognition*, 25 (4) , 807-819.
- [6] Kano, F., Naik, H., Keskin, G., Couzin, I. D., & Nagy, M. (2022) . Head-tracking of freely-behaving pigeons in a motion-capture system reveals the selective use of visual field regions. *Scientific Reports*, 12 (1) , 19113.

オックスフォードでチベット研究

第12期 井内 真帆

2024年1月より1年間の予定でオックスフォード大学のウォルフソンカレッジに滞在して研究をしています。オックスフォード大学のチベット研究はアウンサンスーチーの夫としても知られるチベットヒマラヤ地域の研究者マイケル・アリス（1946-1999）によって始められました。現在は第16回を数える第2回国際チベット学会（1979年）や第7回国際若手チベット学会（2024年）のホストを行うなど、国際的にチベット研究をリードしてきた研究機関のひとつです。オックスフォード大学のチベット研究は主に、アジア・中東研究（旧オリエンタルインスティテュート）とウォルフソンカレッジで行われており、現在はウルリカ・ルースラー教授と語学を担当するチベット人講師のラマジャブ博士の専任教員二人がチベット関係の講義を担当しています。また、ウォルフソンカレッジには2012年に創立されたチベットヒマラヤ研究センターがあり、イギリスでチベット研究が単独で行われている唯一の研究機関です¹。センターでは世界中から研究者を招いて行われるセミナーが定期的開催され、活発な研究活動が行われています。私も2月に“Post-Imperial Tibetan History and Its Sources”というタイトルで発表を行いました。

オックスフォード大学はチベット語の貴重文献も多く所蔵しており、それらはボドリアン図書館の中のひとつであるウェストン図書館にあります²。同ライブラリーには軍人であり探検家としても知られるヤングハズバンド（1863-1942）使節団のチベット遠征（1903-1904）の際に持ち帰られたチベット語文献やマイケル・アリスの研究ノートなどが所蔵されています。また、ウェストン図書館にはチベッ

ト語文献専門のスタッフのチャールズ・マンソン博士が所属しており、日本の大学図書館もチベット語の貴重書を多く所蔵しますが、オックスフォード大学のように古典チベット語を読むことができる専属の研究者を置いているところはありません。先に書いたとおり、オックスフォード大学にはチベット研究の専任教員が2人いますが、チベット語のネイティブの教員やチベット語書籍の専門スタッフを確保できているということは日本の研究機関との大きな違いであると感じています。

それから、直接研究内容とは関係はないですが、研究を行う上で非常に大切なことである生活面についてですが、昨今の円安と物価高でイギリスでの長期滞在はかなりの出費です。こちらは家賃や光熱費が非常に高く、また、家族の保険や教育費は研究費からは支出ができませんが、滞在費用の中でかなりの割合を占めます。イギリスの未就学児の教育費は非常に高額で、私も滞在の当初は子供をウォルフソンカレッジ付属の保育園に通わせましたが、保育料は日本の3倍ほどで非常に高額なものでした³。海外での研究滞在はまずは生活環境を整える必要があり、家を探したり、保険を選んだり、子供の学校について調べたり、と下調べや事務手続きにもかなりの時間を費やします。私自身も子供を連れての長期滞在は初めてのことで知らないことが多くあり、全一から調べ、普段読んだことがない種類の英語の書類をたくさん読むことになりました。ビザや保険、学校のことなど、その時々で状況は変わるのですぐに情報は古くなってしまいますが、帰国後は海外に長期滞在する研究者と研究環境の整備についてもなんらかの情報交換ができればと考えています。



写真：ユニバーシティーチャーチの塔から見たラドクリフカメラ

1 <https://thsc.web.ox.ac.uk/home#collapse3780596>

2 ボドリアン図書館のチベット語文献に関しては以下からオンラインで検索することができます。
<https://karchak.bodleian.ox.ac.uk/>

3 ちなみに、イギリスでは4歳から小学校のレセプションクラスの義務教育が始まるそうで、公立の学校では授業料は無料、給食費などもレセプションクラスや2年生までは無料など、費用はそこまでかからないようです。私の子供も滞在の後半は小学校に行くことになり、保育料は必要なくなりました。

宇宙生命探し～欧米の分野間連携の動きを捉える～

第14期 行方 宏介

宇宙には、太陽のような恒星が無数に存在し、その星の周りには「太陽系外」惑星が回っている。そこで私たちは問いかける。「そこには生命が存在するのか？」天文学は今、その謎に迫るフェーズに差し掛かっている。だが、こうした問いに挑むには、天文学だけでは不十分だ。太陽系惑星科学や太陽物理学といった他の学問領域の協力が不可欠である。しかし、実際これらの分野は長い間、独立して発展してきた背景があり、連携は十分に進んでいない。本稿では、近年欧米諸国での分野間連携に関わった体験を記す。

2024年4月に白眉に着任してから、異分野連携を学ぶために海外のワークショップに積極的に参加してきた。2024年6月、アメリカのカリフォルニア工科大学(Caltech)で行われた「KISSワークショップ」では、恒星、惑星など4つの分野から世界トップクラスの研究者が集まり、「太陽系外」惑星の環境に関する新テーマを発掘するための議論が行われた。研究者の滞在費や旅費を全額カバーするサポート体制が整えられており、異分野の研究者同士が、対面で深い交流を持つことを目的としていた。私は、幸運にも「恒星」研究者としてこの場に招待された唯一の日本人であった。

ワークショップの進行は非常にユニークだった。参加者は全員が円卓に座り、1週間にわたりブレインストーミングを行うスタイルだ(図1, 2)。「我々が解決すべき問題とは何か？」その定義を見つけ出すところから始まった。しかし、すぐに気づかされたのは、分野ごとに使われる専門用語の意味が異なるという現実だった。ホワイトボードに用語を書き出し、お互いの言葉の定義を明確にするところから議論はスタートした(図1)。この過程で思い出したのは、NASAの異分野連携の専門家であるV. Airapetian氏の「異分野連

携で最も重要なのは、異分野を理解しようとする意欲」という言葉だ。この言葉を思い出し、むしろこの困難な時間を楽しむことにした。新しい分野を切り開くとはこういうことか、と圧倒された会議だったが、圧倒される経験こそを欲していた私にとって大きな原動力になる経験だった。

1週間の議論は濃密だったが、ワークショップ中にはリフレッシュの時間も設けられていた。例えば、チームに分かれて「コーンホール」(図2)を行う時間などもあった(私はMVP級のプレーでチームを優勝に導いた)。こうした時間も、分野の違いを超えた交流が自然と深め議論を活性化させるに重要だった。

幸いにも、今回のワークショップを通じて問題点と今後の方針を整理することができ、現在、共同でレビュー論文を執筆中である。日本では、欧米に比べて異分野間の連携にやや遅れが見られるものの、恒星と惑星を繋ぐ新たな動きが少しずつ見え始めている。特に、分野を超えた協力を促進するための共同予算の確保に向けた試みが進行中であり、これらの取り組みに対し、自分の経験をどうフィードバックできるかを、今まさに考えているところである。

さて、話は変わるが、9月にはオーストリアのウィーン大学で別の分野間連携ワークショップに参加した(図3)。ヨーロッパの最新の動向を知る、まさに絶好の機会だった。歴史の息吹を感じるウィーンの街並みを歩きながら交わした議論は、今も鮮明に心に残っている。一方で、ワイナリーでの夕食中、自分の酒の弱さを忘れ、顔を真っ赤にしてへばっていた光景だけは、そっと記憶の片隅に追いやりたいと思っている。



図1 ワークショップの様子



図2 ワークショップの様子、ミニゲームの様子



図3 オーストリアの市内、天文台、食事の様子

ポスト白眉の日常

潮 雅之 USHIO Masayuki

第9期 特定准教授（生態学研究センター）2018年10月1日～2022年8月31日 在職
 香港科技大学海洋学科 2022年9月1日～現職

香港の海でイルカを探す

白眉センターで4年弱お世話になり、縁あって2022年9月から香港科技大学の海洋学科で教育研究に精を出しています。白眉センターに採用いただいた際には、まさかその4年後に香港で研究室を運営しているとは夢にも思っていませんでした。さらに言えば、大学院時代にボルネオ島の熱帯雨林の研究からこの世界に入って、その後日本のフィールドをメインに研究し、いつの間にか香港の海を研究することになるとは、縁というかタイミングというか、色々制御できないものに動かされてここにいるなあ、と思っています。

香港に来た当初は研究上の人脈があまりなく（実は白眉同期の平野さんが違う学科に先に着任しておられました）、香港の大学事情も分かっていなかったのも、文字通り手探りの状態で研究室の立ち上げを開始しました。最初の1年は就労関係の書類・保険・ビザ・税金・研究費など、毎日初めてみる書類やルールの理解・確認に大量の時間を費やしていました。2年目からは授業が本格的に始まりましたがこちらも初めてのことで準備には想像以上に時間を費やしました。

研究に関しては「海洋学科所属」という縛りの下、どんなテーマをメインにして生態学研究を進めるか、しばらく悩んでいました。ネットで情報を調べたり、いくつか現場を回っているうちに、香港にはピンクのイルカがいて、人気者かつ保全対象種であることを知り、このイルカのモニタリングに自分の専門である環境DNAの技術が有効ではないか、と思いつきました。つまり、採水だけして、その中のDNAを調べて周辺にいるイルカの個体数・生理状態・分布などを推定することができれば、非侵襲的な方法でイルカの保全に貢献する情報が得られる、と考えたわけです。この分野で研究している人からすればシンプルな発想でしたが、本格的に手を付けている人が多くないこともあり、1年目は苦労したものの、最近になって2つの研究費を獲得できました。また、香港3年目に入るに当たり研究室の大学院生も5人に増え、このプロジェクトは本格的に走り出しています。

異国での研究室立ち上げにはやはり苦戦しましたが（しています）が、得難い経験を日々得られていると感じます。ここからはようやく成果が出始めるフェーズに入るはずですが、これからも楽しんで教育研究を続けていきたいと思っています。



（左上）香港の西側の海域での調査の様子。ラボメンバー・共同研究者たちとピンクイルカを探しつつ採水をしました（右上）香港科技大学のキャンパスは海沿いの斜面にあり、眺めがキレイです（左下）ようやく立ち上がったラボ（右下）大学近くの登山道からは香港らしい高層ビル群が見えます

ポスト白眉の日常

田中 祐理子

2018年10月1日～2021年3月31日 在籍
→ 2021年4月1日～現在 神戸大学大学院国際文化学研究科

コロナ・パンデミックのさなかに異動し、4年目になりました。神戸・六甲山の中腹から遠くに港を臨む職場で、神大マスコットの「うりぼー」と仲良く過ごしています。とはいえ最初の二年はリモート勤務が中心で、生身の学生や同僚と触れ合う生活は、昨年から本格化したばかり。長く研究部局で過ごしてきたので、学生のいる環境での教育・行政業務に、遅ればせながらあくせく取り組んでいます。ふり返れば院生時代以来、研究者ばかりに取り囲まれてきたのですが、この段階でわが子のような年齢の学生たちに教えることが本務になったのはとてもよかった、と感じています。自分なりに学んだり考えたりしてきたことのほとんどが、私の親しんできた言葉遣いでは、若い彼ら・彼女らには届きません。数十年の間、私が読んできた本や聞いてきた言葉について、どんな形にすればその面白さに興味を持ってもらえるかな?と、基本的に「つまらん」という顔をされる教室での時間はつらいですが、人間の思想と歴史を勉強してきた者としては、それらの言葉や文献の存在を少しでも次の世代の人間たちに知ってもらって、それが忘れ去られてしまわないようにと願いながら働けるのは嬉しいことです(いえ、あの「つまらん」の顔を見るのは本当に心折れるのですが…)。

人文研究者の「日常」は、最高に好調でも机に向かって文字を打ってるだけという地味な絵面なので、白眉センターで私が体験した「へえ〜」や「おお〜」という興奮をこの機会にご提供できず申し訳ない思いです。本来の予定では今ごろ本が一冊出版されて、これを宣伝したかったのですが間に合わず。私は科学史と哲学が専門で、白眉センターでは特に20世紀初頭の原子物理学史を研究していました(映画『オッペンハイマー』の世界です)。今はそこから少し脱線して、大戦期の哲学者の本を書いています。コロナ・パニックの時も驚きましたが、ウクライナでもガザでも、歴史研究者から見ると再現する必要など全くないはずの既視感のある出来事が起こっています。過去に生きていた人間の体験や知恵を、どうしたら少しでも生かせるのだろう。おせっかい老婆の心持ちで、もがいております。



オランダ・ライデンでの調査中

活動紹介

2024年度 白眉離任式

第14期 特定助教 坂本 達也

白眉研究者として5年の歳月を過ごされた先生方を送り出すべく、2024年度白眉離任式が2024年9月4日(水)に国際科学イノベーション棟にて行われました。湊長博総長、北川進理事、高倉喜信センター長をはじめ、白眉プロジェクトの運営に尽力してくださっている多くの先生方にお越しいただき、厳かでありながらも和やかな雰囲気の中、離任式が執り行われました。今回の離任式では、第10期白眉研究者7名(発表順)が登壇しました。

- ☆ 大井雅雄さん「Langlands 対応を通して見る数学における「自然性」の考え方」
“What’s the ‘Naturality’ in Mathematics? Through the Langlands Correspondence”
- ☆ 中村栄太さん「学習と進化のモデルに基づく音楽知能情報学」
“Music Intelligent Informatics Based on Models of Learning and Evolution”
- ☆ 相馬拓也さん「シルクロード西漸物語～モンゴルからペルシアへの旅と発見～」
“A Story of Silk Road Westwarding: A Travel and Discovery from Central Eurasia to Persia”

- ☆ 春本敏之さん「昆虫の性を操る微生物たちに学ぶ：生命を分子レベルで操る手法」
“Learning from Reproductive Parasites in Insects: How to Manipulate the System of Life at a Molecular Level”
- ☆ 杉田征彦さん「RNA ウイルスの構造学」
“Structural Studies of RNA Viruses”
- ☆ 池田華子さん「難治性眼疾患の克服を目指して」
“Overcoming Refractory Eye Diseases”
- ☆ 森井悠太さん「カタツムリをめぐる冒険」
“A Wild Snail Chase”

研究者たるもの、やはりこれくらい激しく、自由に活動しなくては！と改めて思えた、ロックン・ロールな講演の数々でした。質疑応答も盛り上がり、異分野に触れることの楽しさや融合することの面白さ、あるいはアカデミアで生きていくことの厳しさを体感する会となりました。最後の森井さんの講演は、「5年間でできた、白眉研究者間のつながりが何より大きな業績だ」という言葉で締めくくられました。残った私たちもそう言えるよう、楽しく、仲良く、研究に励んでいけたら良いと思います。(14期・坂本)



写真：全体集合写真

最前列右から大井さん、相馬さん、春本さん、北川理事、湊総長、高倉センター長、杉田さん、池田さん、森井さん

白眉セミナー

白眉センターでは原則として8月を除く月2回（第1・3火曜日16時45分より）セミナーを開催しています。各研究者が順番に企画担当者となり、様々なトピックについて議論が行われます。2011年度からは通常英語で発表・質疑応答を行っています。以下に2024年1月～12月のセミナー情報を掲載します。

2024年

- ◆第260回 白眉セミナー 2024年12月17日(火)
村田 陽（14期 経済学研究科 特定助教）
「哲学的急進派と古代ギリシア受容：民主政、ソクラテス、帝国の観点から」
- ◆第259回 白眉セミナー 2024年11月19日(火)
下田 麻子（14期 医学研究科 特定助教）
「バイオインスパイヤードマテリアルの設計と機能」
- ◆第258回 白眉セミナー 2024年11月5日(火)
Anastasia FEDOROVA（14期 文学研究科 特定准教授）
「1950年代を考察する：分析の対象・研究メソッドとしての日本映画」
- ◆第257回 白眉セミナー 2024年11月1日(金)
Bahareh KAMRANZAD (Chancellor's Fellow and Lecturer, University of Strathclyde, 白眉元9期)
「Navigating Future of Coastal Areas in a Changing Climate」
- ◆第256回 白眉セミナー 2024年10月15日(火)
早川 龍（14期 基礎物理学研究所 特定助教）
「量子、トポロジー、そして計算複雑性」
- ◆第255回 白眉セミナー 2024年10月1日(火)
本郷 峻（14期 アジア・アフリカ地域研究研究科 特定講師）
「野生動物保全における地域知と科学の間：いかにして両者は手を結めるのか？」
- ◆第254回 白眉セミナー 2024年9月17日(火)
行方 宏介（14期 理学研究科 特定助教）
「活発だった太古の太陽は、生命誕生環境に影響したか？」
- ◆第253回 白眉セミナー 2024年8月20日(火)
坂本 達也（14期 人間・環境学研究科 特定助教）
「Decoding marine fish life histories: insights from chemical signatures」
- ◆第252回 白眉セミナー 2024年7月23日(火)
Youdiil OPHINNI（14期 東南アジア地域研究研究所 特定助教）
「One Health approach to infectious diseases: Metaviromic analyses from non-human primates in Indonesia」
- ◆第251回 白眉セミナー 2024年7月16日(火)
海老原 志穂（14期 文学研究科 特定助教）
「チベット牧畜文化を記述する」
- ◆第250回 白眉セミナー 2024年6月25日(火)
Patrick VIERTHALER（14期 人文科学研究所 特定助教）
「記憶史を研究すること：歴史家の目を通じての集合的記憶とその政治的・社会的影響」
- ◆第249回 白眉セミナー 2024年6月4日(火)
袁輪 陽介（14期 理学研究科 特定准教授）
「量子の渦を可視化する」
- ◆第248回 白眉セミナー 2024年5月14日(火)
田近 周（13期 人間・環境学研究科 特定助教）
「無脊椎動物古生物学の研究」
- ◆第247回 白眉セミナー 2024年4月23日(火)
猪瀬 朋子（13期 高等研究院 物質・細胞統合システム拠点 (iCeMS) 特定准教授）
「表面分子修飾ナノワイヤーを用いた単一細胞手術法の実現」
- ◆第246回 白眉セミナー 2024年4月9日(火)
高松 哲平（13期 理学研究科 特定助教）
「数論幾何学 - 還元と有限性の研究」
- ◆第245回 白眉セミナー 2024年3月19日(火)
Julie Ann DELOS REYES（13期 東南アジア地域研究研究所 特定助教）
「Finance in nature and the nature of finance: Understanding the limits and possibilities of transition finance in the Asia Pacific」
- ◆第244回 白眉セミナー 2024年3月5日(火)
松本 達矢（13期 理学研究科 特定助教）
「Deciphering cosmic explosions」
- ◆第243回 白眉セミナー 2024年2月20日(火)
大下 翔誉（13期 基礎物理学研究所 特定助教）
「Black holes: why they matter」
- ◆第242回 白眉セミナー 2024年2月6日(火)
佐藤 駿（13期 理学研究科 特定助教）
「カワズメ科魚類における行動・生態・進化：私の研究の概要」
- ◆第241回 白眉セミナー 2024年1月16日(火)
大貫 菜里（13期 高等研究院 ヒト生物学高等研究拠点: (ASHBi) 特定助教）
「Primate Evolution driven by Endogenous Retroviruses」

センター日誌 (2024年1月1日～2025年1月31日)

<u>2024年</u>		7月16日	第251回白眉セミナー
1月16日	第241回白眉セミナー	7月23日	第252回白眉セミナー
2月6日	第242回白眉セミナー	7月31日	大井雅雄(特定助教) 離任
2月20日	第243回白眉セミナー	8月20日	第253回白眉セミナー
3月4日	第38回運営委員会	9月4日	第10期白眉離任式
3月5日	第244回白眉セミナー	9月17日	第254回白眉セミナー
3月15日	第15期公募情報公開	9月30日	相馬拓也(特定准教授)、春本敏之、山田真太郎(以上、特定助教) 離任
3月19日	第245回白眉セミナー	10月1日	第255回白眉セミナー
3月31日	田原弘量(特定准教授)、森井悠太、中村栄太、虫賀幹華(以上、特定助教) 離任	10月15日	第256回白眉セミナー
4月1日	大谷由香、後藤明弘、Anastasia FEDOROVA、葦輪陽介(以上、特定准教授)、本郷峻(特定講師)、海老原志穂、Youdiil OPHINNI、木下実紀、坂本達也、下田麻子、武田紘樹、行方宏介、早川龍、Patrick VIERTHALER、村田陽、山田真太郎(以上、特定助教) 着任	10月31日	★池田華子、Amin CHABCHOUB(以上、特定准教授) 離任
	第15期公募受付開始	11月1日	第257回白眉セミナー
4月9日	第246回白眉セミナー	11月5日	第258回白眉セミナー
4月18日	第14期研究計画発表会	11月19日	第259回白眉セミナー
4月23日	第247回白眉セミナー	12月1日	第15期伯楽会議
4月26日	第15期公募受付締切	12月6日	第39回運営委員会
5月14日	第248回白眉セミナー	12月17日	第260回白眉セミナー
5月30日	第14回白眉プロジェクト年次報告会		<u>2025年</u>
6月1日	吉野達彦(特定准教授) 着任	1月16日	Lucy Olivia MCNEILL(特定助教) 着任
6月4日	第249回白眉セミナー	1月21日	第261回白眉セミナー
6月16日	Sanjeeta SHARMA POKHAREL(特定助教) 着任	1月25日	白眉の日
6月25日	第250回白眉セミナー	1月26日	15周年記念式典・シンポジウム
7月1日	Piotr PSTRAGOWSKI(特定准教授) 着任		★卓越研究員

受賞

- 田近 周 (13 期・人間・環境学研究所・特定助教)
研究奨励賞 日本古生物学会 2024 年 2 月 5 日
- 大下 翔誉 (13 期・基礎物理学研究所・特定助教)
第 15 回研究奨励賞 (桜舞賞) 理化学研究所 2024 年 3 月 12 日
- 仲間 絢 (13 期・文学研究科・特定准教授)
第 31 回鹿島美術財団賞 公益財団法人鹿島美術財団 2024 年 5 月 14 日
- OPHINNI Youdiil (14 期・東南アジア地域研究研究所・特定助教)
最優秀口頭発表賞 第 1 回 International Conference on Drugs Research and Policy 2024 年 5 月 15 日
- CHENG Shin-Ru (13 期・法学研究科・特定助教)
TAIWAN TOP GRANT AWARD 國家科學及技術委員會 (台湾) 2024 年 8 月 7 日
- 木下 美紀 (14 期・文学研究科・特定助教)
岸本忠三出版助成 大阪大学出版会 2024 年 8 月
- 門田 美貴 (13 期・法学研究科・特定助教)
全国憲法研究会研究奨励賞 (論文「集会の監視と萎縮効果に関する予備的考察」に対して)
全国憲法研究会 2023 年 10 月
田上穰治賞 (奨励賞) 比較憲法学会 2024 年 10 月 26 日
- VU Ha Thu (13 期・経済学研究所・特定助教)
Hirose foundation research grant award. <https://hirose-isf.or.jp/> (2024 年 12 月 14 日)
- 小俣ラポー 日登美 (12 期・人文科学研究所・特定准教授)
第 21 回 (令和 6 (2024) 年度) 日本学術振興会賞 独立行政法人日本学術振興会
受賞者決定報道発表: 2024 年 12 月 19 日 受賞日: 2025 年 2 月 4 日
第 21 回 (令和 6 年度) 日本学士院学術奨励賞 日本学士院
受賞者決定報道発表: 2025 年 1 月 14 日 受賞日: 2025 年 2 月 4 日

出版物

- 門田 美貴 (13 期・法学研究科・特定助教)
『集会の自由と「場」への権利』 尚学社 2024 年 4 月 1 日
- DELOS REYES Julie Ann (13 期・東南アジア地域研究研究所・特定助教)
寄稿『Contemporary Economic Geographies: Inspiring, Critical and Plural Perspectives』
Bristol University Press 2024 年 1 月 12 日
- CHING Chao-jung 慶 昭蓉 (12 期・人文科学研究所・特定准教授)
共著『中國國家圖書館藏西域文書 漢文卷』 (全二冊) 中華書局 2024 年 1 月 31 日
- 小俣ラポー 日登美 (12 期・人文科学研究所・特定准教授)
共著『キリシタン 1622 殉教・列聖・布教聖省』 2024 年 1 月 31 日
共著『Saintetés jésuites: Genre et Histoire (XVIe-XIXe siècles)』
Presses universitaires de Louvain, Louvain-la-Neuve, 2024 年 9 月
- 西田 愛 (11 期・人文科学研究所・特定准教授)
共著『古代チベット仏教伝道文学と葬儀の変容』 公益財団法人 東洋文庫 2024 年 3 月 11 日
- 井上 浩輔 (13 期・医学研究科・特定准教授)
『医学研究のための 因果推論レクチャー』 医学書院 2024 年 4 月 8 日
- 大谷 由香 (14 期・人文科学研究所・特定准教授)
寄稿『月刊任職』 2024 年 4 月号・5 月号・6 月号 興山舎 2024 年 4 月 1 日・5 月 1 日・6 月 1 日
寄稿・鈴木董編『講義 宗教の「戦争」論: 不殺生と殺人肯定の論理』 山川出版社 2024 年 7 月 20 日
寄稿・龍谷大学宗教部編『今この苦によりそう』 (りゅうこくブックス 138)
龍谷大学宗教部 2024 年 10 月 18 日
- 大谷 育恵 (12 期・人文科学研究所・特定助教)
邦訳『遊牧国家 匈奴の歴史と文化遺産』 雄山閣 2024 年 5 月 31 日
- 本郷 峻 (14 期・アジア・アフリカ地域研究研究科・特定講師)
監修『図鑑 MOVE 動物 新訂二版』 講談社 2024 年 6 月 21 日
- 佐藤 駿 (13 期・理学研究科・特定助教)
執筆・監修『小学館の図鑑 NEO メダカ・金魚・熱帯魚』 (ISBN10: 4-09-217228-)
小学館 2024 年 6 月 25 日
- VIERTHALER Patrick (14 期・人文科学研究所・特定助教)
寄稿 "Founding Father or National Traitor? Contested Memories of Syngman Rhee in Mid-1990s South Korea." *Korean Studies* 48 2024 年 7 月 2 日
参照: <https://dx.doi.org/10.1353/ks.2024.a931007>.
- 武田 紘樹 (14 期・理学研究科・特定助教)
著者: 武田 紘樹, 翻訳: 전종훈 『입자마자 우주의 구조가 보이는 우주물리학 사전』 보너스 2024 年 7 月 10 日
* 『広すぎる宇宙の謎を解き明かす 14 歳からの宇宙物理学』 (KADOKAWA 2023 年 3 月 20 日) の韓国語翻訳
- 海老原 志穂 (14 期・文学研究科・特定助教)
『アムド・チベット語の発音と会話 (改訂版)』 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 2024 年 7 月 31 日
- 東島 沙弥佳 (12 期・総合博物館・特定助教)
『しっぽ学』 光文社 2024 年 8 月 20 日
- 相馬 拓也 (10 期・野生動物研究センター・特定准教授)
『遊牧民、はじめました。: モンゴル大草原の掟』 光文社 2024 年 9 月 19 日

- 行方 宏介 (14 期・理学研究科・特定助教)
共著「科学 特集「スーパーフレアの時代」」 岩波書店 2024 年 11 月 22 日
- VU Ha Thu (13 期・経済学研究科・特定助教)
共著 Nhu Ngoc Nguyen, Daisaku Goto, Duc Tran, and Vu Ha Thu. "Nudging households to save electricity with feedback: Experimental evidence from Vietnam". *Energy Policy*, Volume 195, 114378.
2024 年 12 月 DOI: <https://doi.org/10.1016/j.enpol.2024.114378>
- CHENG Shin-Ru (13 期・法学研究科・特定助教)
"How to Address Forms of Targeted Advertising that Reduce Competition in Digital Marketplaces: Adapting a Taiwanese Practice," *Journal of the Antitrust and Unfair Competition Law*, 33 (2) 2024 年

メディアでの紹介・出演

- 草田 康平 (11 期・高等研究院 物質-細胞統合システム拠点 (iCeMS)・特定准教授)
NHK『サイエンス ZERO』にて紹介 2024 年 3 月 3 日
- 東島 沙弥佳 (12 期・総合博物館・特定助教)
NHK『ダーウィンが来た!』に出演 2024 年 3 月 3 日
NHK『あしたが変わるトリセツショー』に出演 2024 年 3 月 7 日
毎日新聞に研究成果が掲載 2024 年 5 月 2 日夕刊
マイナビ学生の窓口#もやもや解決ゼミ「なぜ人間にはしっぽがないの?」に掲載 2024 年 8 月 23 日
週刊現代「書いたのは私です」インタビュー記事が掲載 2024 年 9 月 28 日号
京都大学会報誌 KU FANBOOK Vol.5 EYESON きらめく研究者たちに掲載 2024 年 10 月号
Wedge オンラインにインタビュー記事が掲載 2024 年 10 月 12 日
少年新聞社「動物のしっぽの役割」執筆と監修 2024 年 10 月 18 日号
ラジオ「レコレール」に出演 2024 年 11 月 19 日
ほほ日の学校「動物のふしぎがいっぱい! しっぽ学の世界」に出演 2024 年 11 月 22 日
- 坂本 達也 (14 期・人間・環境学研究科・特定助教)
NHK『ダーウィンが来た! なんだこりゃ!! 東京の海 イワシ大集結』に出演 2024 年 7 月 14 日
- DELOS REYES Julie Ann (13 期・東南アジア地域研究研究所・特定助教)
Bloomberg に記事が掲載 2024 年 2 月 6 日、2024 年 11 月 29 日
Monthly Review に記事が掲載 7-8 月夏号
Eco-Business に記事が掲載 2024 年 12 月 13 日
Nikkei Asia に記事が掲載 2024 年 10 月 11 日
参照: <https://asia.nikkei.com/Opinion/The-case-for-U.S.-China-cooperation-on-climate-goals>
Monthly Review に記事が掲載 2024 年 7 月 1 日
参照: <https://monthlyreview.org/2024/07/01/net-zero-and-the-china-challenge-decarbonization-amid-great-power-competition-in-the-indo-pacific/>
- 海老原 志穂 (14 期・文学研究科・特定助教)
朝日新聞読書欄に記事が掲載 2024 年 9 月 14 日
- VIERTHALER Patrick (14 期・人文科学研究所・特定助教)
オーストリアの日刊紙『Der Standard』にインタビュー記事が掲載 2024 年 12 月 4 日
- Science Talks TV に出演
参照: https://sciencetalks.org/ja/kyodai_hakubicenter_kumom/
2024 年 3 月 15 日~ 2024 年 11 月 23 日
・ 安達 俊介 (12 期・理学研究科・特定助教)
・ 井内 真帆 (12 期・文学研究科・特定准教授)
・ 大谷 育恵 (12 期・人文科学研究所・特定助教)
・ 黒田 悠介 (12 期・薬学研究科・特定助教)
・ 包含 (12 期・情報学研究科・特定助教)
・ 東島 沙弥佳 (12 期・総合博物館・特定助教)
- 大谷 由香 (14 期・人文科学研究所・特定准教授)
京都新聞夕刊「現代のことば」連載
2024 年 5 月 31 日「物語の力」
2024 年 8 月 6 日「関心領域展開」
2024 年 10 月 10 日「壬生寺の猿」
2024 年 12 月 23 日「紫式部のその後」
- SHARMA POKHAREL Sanjeeta (14 期・アジア・アフリカ地域研究研究科・特定助教)
Mongabay にインタビュー記事「Exploring the science of Asian elephants」が掲載 2024 年 5 月 27 日
参照: <https://news.mongabay.com/2024/05/exploring-the-science-of-asian-elephants-interview-with-sanjeeta-sharma-pokharel/>
The Nepali Times に記事が掲載 2024 年 12 月 31 日
参照: <https://nepalitimes.com/news/breaking-the-mold>
- 小俣ラポー 日登美 (12 期・人文科学研究所・特定准教授)
『週刊読書人』3499 号に著書「殉教の日本」が紹介 2024 年 7 月 28 日
- KyotoU Future Commons (ビジュアルブック) に掲載 2024 年 10 月 15 日
・ CHABCHOUB Amin (第 11 期・防災研究所・特定准教授)
・ 門脇 浩明 (第 11 期・農学研究科・特定准教授)
・ 東島 沙弥佳 (第 12 期・総合博物館・特定助教)
・ 有蘭 美沙 (第 13 期・医学研究科・特定准教授)
・ 垣内 伸之 (第 12 期・医学研究科・特定准教授)
・ 井上 浩輔 (第 13 期・医学研究科・特定准教授)
・ DELOS REYES Julie Ann (第 13 期・東南アジア地域研究研究所・特定助教)

第14期白眉研究者



●海老原 志穂

文学研究科
チベット・ヒマラヤ地域における牧畜文化の多層性に関する記述言語学的・地理言語学的研究
東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所



●大谷 由香

人文科学研究科
中世日本仏教における戒律実践の実態とその根拠となる思想の考察
龍谷大学文学部仏教学科



●Youdiil OPHINNI

東南アジア地域研究研究所
人新世における脆弱な結びつき：インドネシアの自然界と人間社会の接点でのウイルスに関するワンヘルス研究
神戸大学医学研究科



●木下 実紀

文学研究科
イラン人ディアスポラによる文学の体系的研究
大阪大学人文学研究科



●後藤 明弘

医学研究科
記憶の長期的な保存機構の理解と応用
京都大学医学研究科



●坂本 達也

人間・環境学研究所
地球温暖化とイワシ類の魚種交替：化石分析を通じた過去からの洞察
ポルトガル海洋大気研究所



●下田 麻子

医学研究科
細胞外小胞表層糖鎖プロファイリング技術を活用した分離精製技術の開発と疾患の診断・治療への応用
京都大学医学研究科



●Sanjeeta SHARMA POKHAREL

アジア・アフリカ地域研究研究科
絶滅した古代日本ゾウの古生態を再構築する
京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科



●武田 紘樹

理学研究科
コンパクト連星合体からの重力波の偏極モード探査による極限環境での重力理論検証
日本学術振興会 / 京都大学理学研究科



●行方 宏介

理学研究科
太陽圏進化学の新機軸創成：若い太陽型星の突発現象の集中的調査による太古の太陽地球環境の再現
国立天文台



●早川 龍

基礎物理学研究所
量子計算を用いた高速位相的機械学習法の開発と計算複雑性の解析
京都大学大学院理学研究科物理学宇宙物理学専攻



●Patrick VIERTHALER

人文科学研究科
ポスト冷戦時代の歴史認識論争のグローバルヒストリー―「冷戦前線」地域における加害者／協力者の記憶を中心に―
京都大学大学院文学研究科現代文化学専攻

名前
受入部局
研究課題
前職

● GL: グローバル型 (従来型)



●Anastasia FEDOROVA

文学研究科
1950年代の日本映画と民主主義
ロシア国立研究大学高等経済学院



●Piotr PSTRAGOWSKI

数理解析研究所
形と算術：プリズムコホモロジー
ハーバード大学



●本郷 峻

アジア・アフリカ地域研究研究科
地域住民と科学者の共同制作による熱帯雨林野生動物の持続的な狩猟システムの確立
京都大学アフリカ地域研究資料センター



●Lucy Olivia MCNEILL

理学研究科
高解像度観測の時代に向けた超新星前質量損失の理論的更新
理化学研究所 数理解造プログラム



●袁輪 陽介

理学研究科
光で拓く量子流体・量子渦の科学
大阪大学基礎工学研究科



●村田 陽

経済学研究科
統治する哲学者ソクラテス：哲学的急進派の植民地論と19世紀英国における古代ギリシア受容
日本学術振興会 / 京都大学経済学研究科



●山田 真太郎

医学研究科
発癌に関連する転写制御領域(エンハンサー)の網羅的な同定と、ゲノム修復の破綻によりホルモン刺激依存的に癌遺伝子が過剰発現して細胞が癌化する仕組みの解明を通じた発癌プロセスの根本的な理解
京大生命科学研究科



●吉野 達彦

理学研究科
超高活性 C-H 活性化触媒の創出と高難度物質変換反応の開発
北海道大学大学院薬学研究院

『白眉センターだより』第22号

2025年2月28日発行
編集・発行 京都大学白眉センター
〒606-8501 京都市左京区吉田本町
TEL: 075-753-5315
Eメール: hakubi@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp
https://www.hakubi.kyoto-u.ac.jp/
印刷 株式会社 サンワ
©2024 The Hakubi Center, Kyoto University

表紙写真：2017年元旦、ナミブ砂漠(ナミビア)にて撮影(撮影者：坂本達也)

中表紙写真：2016年12月、エトーシャ国立公園(ナミビア)にて撮影(撮影者：坂本達也)